今だから言える

私は、こんな支援が欲しかった！

熊本地震を経験した「育児中の女性」へのアンケート報告書

2018.03

熊本市男女共同参画センターはあもにい

熊本地震を経験した「育児中の女性」へのアンケート調査

目　　次

はじめに ……1

Ⅰ　調査概要 ……2

1．調査目的
2．調査項目
3．調査対象
4．調査時期
5．調査方法
6．回収結果
7．スケジュール
8．調査協力団体等
9．参考資料

Ⅱ　調査結果の概要

1．回答者の属性 ……4
　現在住んでいる場所
　年齢
　職業
2．家族について ……5
　同居している家族構成
　子どもの人数
　子どもの過ごす場所について（震災前・震災後）

3．仕事について ……6

4．避難先について ……7
　避難した場所
　避難所の滞在期間
　避難所を出た理由
　避難所の設備
　避難所での不安・不便
　避難所で「改善した方がよい」と感じたこと
　自宅にとどまった理由

5．被災によって抱えた困難 …… 15
地震直後に直面した困難
地震後の生活での困難
男女共同参画センターはあもにい「親子ルーム」について
地震後に頼りにしたもの
現在の困難
⑴　家族について
⑵　地域について
⑶　仕事について
⑷　健康について
⑸　その他

6．地震を経験して考えたこと …… 27
7．防災・復興のために必要なこと …… 33
8．復興に向けての意見や希望 …… 34
9．調査を終えて …… 40

Ⅲ　使用した調査票 …… 42

Ⅳ　参考資料
1．熊本市男女共同参画センターはあもにいの熊本地震後の状況 …… 49
2．熊本市男女共同参画センターはあもにいの取り組み …… 53
避難所キャラバンとその他の支援、啓発事業

はじめに

熊本地震の発生からもうすぐ二年。あの瞬間の恐怖と一瞬のうちに大事なものを失うという被災経験は、一言では言い尽くすことのできない、辛く悲しい出来事でした。

熊本市男女共同参画センターはあもにいは、熊本市の中央区に位置しており、平成24年から民間の指定管理者により管理運営を行っています。熊本地震による被害は、幸いにもメインホールの一部損損傷などにとどまり全館使用不可という事態は免れたため、発災からおよそ３週間後には、集約避難所としての役割を担いました。

本調査は、私たちが発災直後から取り組んだ避難所の環境改善と性被害防止啓発事業などの「避難所キャラバン」の中で見えてきた、子育て世代の女性の抱えた負担感に焦点をあててアンケート調査を行ったものです。観測史上初と報告される大規模地震の後に余震回数が4,100回を超えるという、いつ終わりが来るのかわからないという真っ暗なトンネルの中で、小さな子どもを抱え守り続けた女性たちおよそ1,200人にご協力いただき、その声をまとめました。併せて、当館が発災直後に全国女性会館協議会などの支援を得て取り組んだ「避難所キャラバン」の報告書を載せています。

私たちが失意のどん底にいたとき、全国から寄せられた支援や貴重な助言など、人と人とのつながりの中で気づき得たものは計り知れません。今後も私たちの経験を少しでもプラスに変え次につないでいくために、被災地にある男女共同参画センターとしての取り組みを発信し続けたいと思います。本調査結果が、全国の男女共同参画センターや自治体、支援団体などの、今後の防災に関する取り組みに少しでもお役に立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査を行うにあたりご協力いただいた関係者の皆様、九州ルーテル学院大学人文学部の永野典詞教授と香﨑智郁代講師に心より感謝申し上げます。

平成30年３月

熊本市男女共同参画センターはあもにい
館長　藤井宥貴子

Ⅰ　調査概要

1．調査目的

2016 年 4 月 14 日及び 16 日、熊本地震が発生し甚大な被害をもたらした。過去に発生した災害において、女性たちが様々な困難を抱えたことによる課題が少なからず明らかになっていた。そこで、このたびの震災発生から一年を経た今、特に子育て期にある女性たちの被災状況を検証するとともに、被災時及び復興段階での女性をめぐる諸問題の解決に向け調査を実施するもの。

2．調査項目

ア、避難中の生活について
イ、避難後の生活について
ウ、震災後の困難について
エ、現在の困りごとについて
オ、復興に向けての意見
カ、震災を体験して生きる姿勢や考え方の変化
キ、防災における男女共同参画の視点を活かすために取り組むこと

3．調査対象

熊本市内に居住する未就学児を持つ女性
配布先：熊本市内の保育園、幼稚園、認定こども園等の保護者、
はあもにいを利用する各種団体・グループ等の利用者

麻生田保育園	中島保育園
あゆみ保育園	西里保育園
春日保育園	白山保育園
京塚保育園	菱形保育園
京町保育園	二岡保育園
隈庄幼稚園	本荘保育園
熊本藤富保育園	愛保育園
黒髪幼愛園	横手保育園
健軍保育園	幼保連携型認定こども園かっぱこども園
幸田保育園	幼保連携型認定こども園つばめこども園
清水保育園	幼保連携型認定こども園なぎさこども園
城東保育園	幼保連携型認定こども園ふわわ
浄法たから保育園	

4．調査時期　　2017 年 7 月～ 8 月

5．調査方法

アンケート用紙を協力団体や個人へ持参・手渡しにより配布。

回収は、回収用専用箱に投函したものを回収または直接回収とした。

6．回収結果

調査用紙配布数	２，４５０
調査用紙回収数	１，２１２
回収率	４９．５％
有効回答数	１，２１１

7．スケジュール

2017 年

４月～ ６ 月	アンケート調査の設問内容について検討 配布先・配布方法の検討、協力体制（行政、団体、施設等）
７月～ ８ 月	調査用紙配布
８月～ 10月	調査用紙回収作業・データ入力
11月～ 12月	九州ルーテル学院大学へ協力依頼、データ集計・分析作業
１月	調査まとめ作業

2018 年

２月～ ３ 月	報告書作成
４月	報告書送付・データ公開・広報

8．調査協力団体等

（一般社団法人）熊本市保育園連盟

熊本市園長会

熊本市市民局市民生活部男女共同参画課

熊本市健康福祉局子ども未来部保育幼稚園課

熊本市教育委員会事務局教育政策課

九州ルーテル学院大学３年　小糸由華さん

9．参考資料

「東日本大震災に伴う『震災と女性』に関する調査」

特定非営利活動法人　イコールネット仙台

TOHOKU GIRLS' VOICES　東日本大震災・被災地の若年女性調査と提言

特定非営利活動法人　オックスファム・ジャパン

「女たちが動く」東日本大震災と男女共同参画視点の支援

みやぎの女性支援を記録する会

Ⅱ　調査結果の概要

1　回答者の属性（N=1211）※小数点第２位を四捨五入しています。

■あなたの現在のお住まいについて

図１

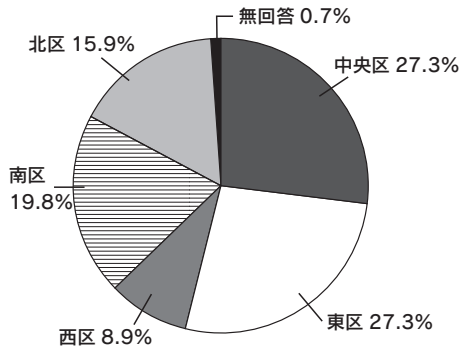
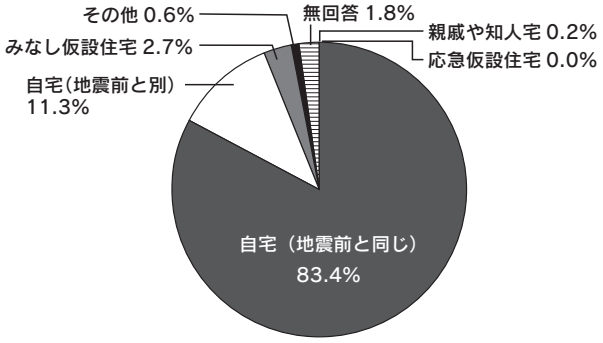
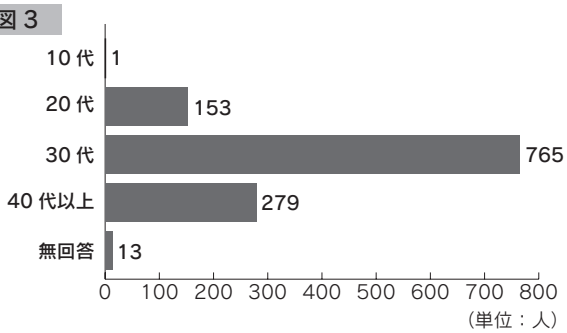


図２



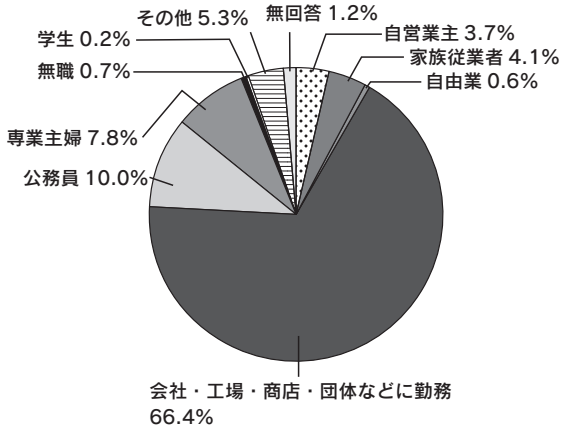
■あなたの年齢

図３



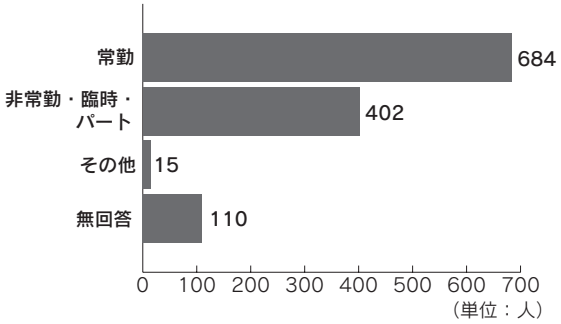
■あなたの職業

図４



■就労形態

図５



現在住んでいる場所について尋ねたところ、83.4％（1010人）の人が「地震前と同じ自宅に住んでいる」と回答、「地震前と別の自宅に住んでいる」のは11.3％（137人）、みなし仮設住宅に住んでいる人は2.7％（33人）である。

今回の調査は、熊本市各区の年少人口割合と同じ比率になるよう各区の保育園等に配布を依頼した。そのため、住んでいる地域の内訳は、中央区27.3％、東区27.3％、南区19.8％、北区15.9％　西区8.9％で、あらかじめ配慮して配布した各区の年少人口割合とほぼ同比率で分布している。**（図１・２）**

年齢については、30代が765人（63.2％）、次いで40代の279人（23.0％）、20代153人（12.6％）の分布となっている。**（図３）**

職業は、「会社・工場等へ勤務」が66.4％（804人）、次いで「公務員」10.0％（121人）、「専業主婦」7.8％（94人）、「家族従業者」4.1％（50人）、「自営業主」3.7％（45人）となっていて、雇われて勤務している人が76.4％を占めている。**（図4）**

（注）この調査は、子育て期にある女性を対象に実施したため、より多く確実に対象者に調査票を届けるため保育園で配布した数が多い。
そのため、働く女性の割合が多くなっている。

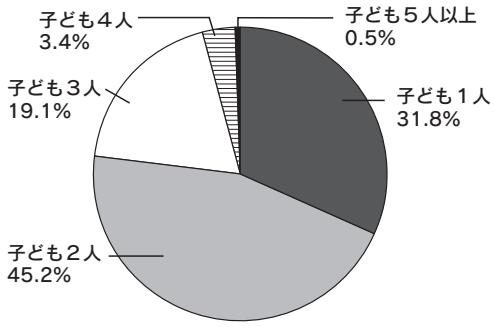
働き方（就労形態）は、「常勤」が684人（56.5％）、「非常勤・臨時・パート」が402人（33.2％）となっている。無回答の110人（9.1％）については、専業主婦で仕事をしていない人である。**（図5）**

2 家族について

同居している家族構成について回答した1147人のうち、「母親と子どものみ」のひとり親世帯（父親が単身赴任を含む）が65世帯、父親が同居しておらず、（母親以外に）祖父母等の親族と同居している世帯が35世帯であった。

子どもの人数は、「2人」が45.2％（542人）、「1人」が31.8％（382人）、「3人」が19.1％（229人）、「4人」が3.4％（41人）、「5人以上」は0.5％（6人）となっている。**（図6）**

図6 **子どもの人数** N=1200



問1　熊本地震以前、お子さんは日中どこで過ごしていましたか。**（図7）**
問2　熊本地震をきっかけに、お子さんの過ごす場所が変わりましたか。**（図8）**

図7 N=1282

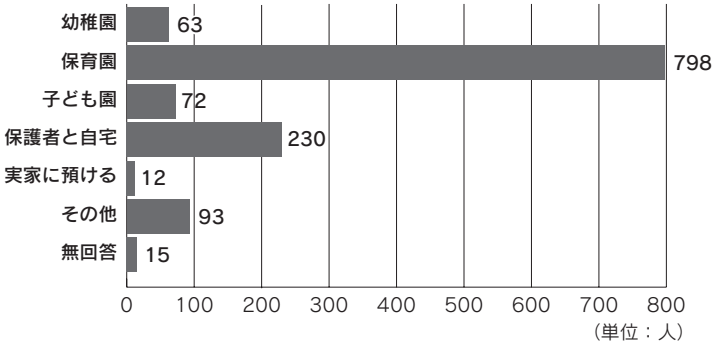
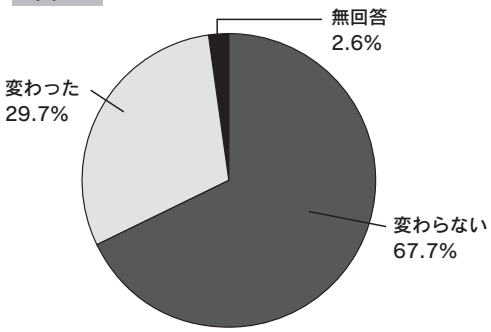


図8 N=1211



＜子どもの過ごす場所について＞

地震前は、「幼稚園・保育園・子ども園」と答えた割合が合わせて72.8％（933人）と約7割を占め、そのほかの回答は、「自宅や実家で見ていた」、「妊娠中でまだ生まれていない」、「出産帰省中だった」等がある。（子どもが複数人いる場合、複数回答もあり　N=1282）**（図7）**

一方、熊本地震後、「子どもの過ごす場所が変わった」割合は29.7％（360人）で、その理由としては、「保育園の休園に伴い、勤務するため祖父母や友人に預けたり、職場へ同伴出勤した」、「実家に避難した」、「仕事を休んで保護者でみた」等が挙げられている。**（図8）**

子どもの過ごす場所が変わった理由として、以下のような回答があった。

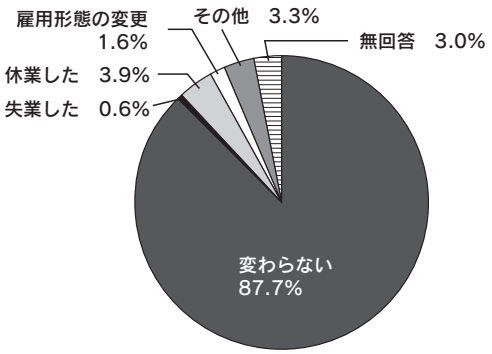
●休園中は、医師会の託児所に預けた。
●休園、仕事が落ち着くまで実家に預けた。
●休園中は病児保育（ボランティアで受け入れ）に数日、その後は職場にできた託児所に預けた。
●休園したので仕事を休んだり、職場の託児所を利用したり、親せきに預けた。
●休園したので義祖父母宅、おば宅・臨時の市立一時保育、実祖父母に来てもらって自宅等。
●休園中は友人に預けた。
●休園中は母の職場に連れて行ったり、（父母の）どちらかが仕事を休んだ。
●園も被害を受けていたので、仕事を辞めて実家で過ごした。
●病児保育が、病児でない子も預かってくれたので、預けた。
●県外の実家に預けた。
●関西の実家に避難。幼稚園・保育園児は実家で過ごし、小学生は近くの学校に１週間ほど転入。
●主人の実家⇒みなし仮設でアパート⇒自宅
●一時的に福岡の助産所に避難した。
●車中泊、福岡の空アパートに一時避難。
●職場の臨時託児所に預けた。
●父の単身赴任先に引っ越しした。
●１ヵ月公園でテント生活。
●無認可保育に預けた。
●父親の仕事の都合もあり、約１週間ウィークリーマンションに住んだ。

3　仕事について

問３　地震を機に就業状況が変わりましたか。

就業状況の変化に対する問いに、87.7％（1062人）は「変わらない」と答え、「変わった」と答えたのは9.3％（113人）。内訳は「休業した」が47人、「雇用形態の変更 」19人、「失業した」７人となっている。「その他」（40人）に具体的に記載された回答は、「パートを始めた」と「時短勤務」がそれぞれ２人、「転職」は８人だが、転職して契約社員へ、転職して正社員から非常勤になったと詳細に記入された答えもあった。それ以外に「勤務地の変更」や、「職場の移転」「仕事を始めた」が各４人、「夜勤があった」「残業が増えた」「仕事内容の変更」が 各２人、「起業」１人となっている。（図９）

図９



問３－１就業状況が変わったと回答された方にお聞きします。その理由を具体的に教えて下さい。

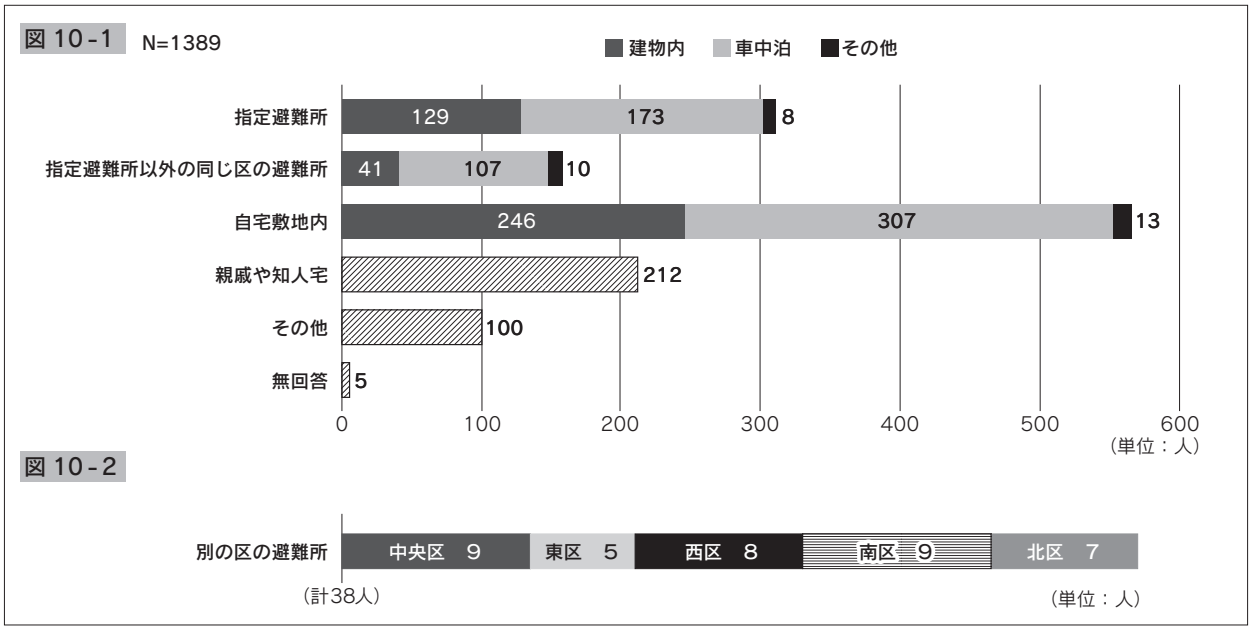
就業状況が変わった理由について尋ねたところ、最も多かったのは、「自己都合」の60人で「夫の転勤や転職」や「子どもの世話」のために、妻（母親）の方が働き方を変えている。 次に多いのは、「事業所の休業」の31人、次いで、「事業所の移転」で10人となっていて「解雇」や「事業所の倒産」と答えた人はいなかった。「その他」（16人）の主な内容は以下の通りである。

・職場が被災して場所も時間も変わった。
・事業縮小に伴い自主退職、福岡への高速バス通勤が出来なくなった。
・職場が被災し仕事の場所がなくなった。
・産廃処理・解体工事の業種で多忙になり残業 が増えた。
・地震後子どもが不安定になり、夫も帰れない日が続き半年後転職。

・育児休暇を延長した。
・地震が来た時を考えて職場環境の良い所に転職した。
・客足がとだえ、給料が減ったため職場を変えた。
・家計の金銭面で働くことが増えた。
・早く帰宅し子どもたちといられる様にパートへ変更した。
・公務員のため災害対応。

4 避難先について

問4　2回目の地震の直後はどこで生活をしていましたか。



※避難先を変えた人もあり、複数回答となっている。

住んでいる区とは別の区の避難所にいた人（38人）（**図10-2**）や指定避難所以外の同じ区の避難所にいた人（計158人）も含め「避難所の建物内」にいた人は170人、避難所で「車中泊」した人は280人いた。一方、自宅の建物内にとどまった人は246人、自宅敷地内で車中泊した人は307人となっていて、いずれも建物内より車で過ごした人の方が多くなっている。（**図10-1**）

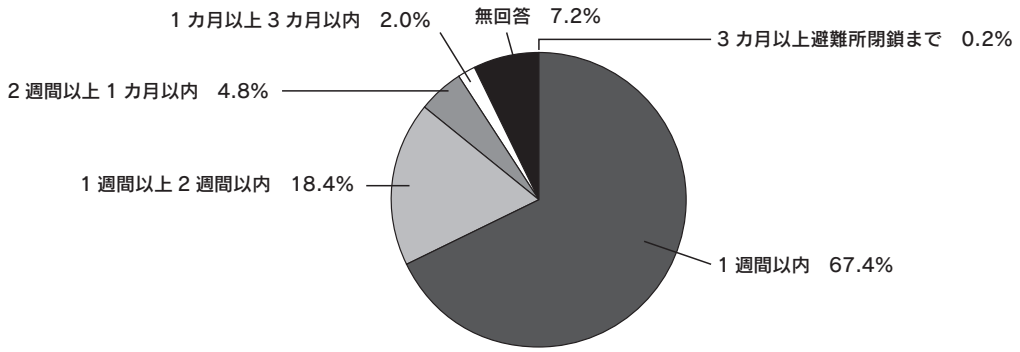
また、「避難所に行ったが、混み合っていて入れなかった」等の回答があり、大型店舗や病院の駐車場、近所の公園や空き地、実家の駐車場などで車中泊した人も相当数に上る。一方、日中は自宅で過ごし、夜間は避難所や車中泊したなど、昼夜で過ごす場所を変えた人や、「子どもが車がいいと言うので」避難所と自家用車に、家族が分かれて過ごした人もいた。

＜避難所について＞

問4-1～4-5は「避難所にいた」と回答した人への質問

問４－１避難所にはどれくらいの期間いましたか。

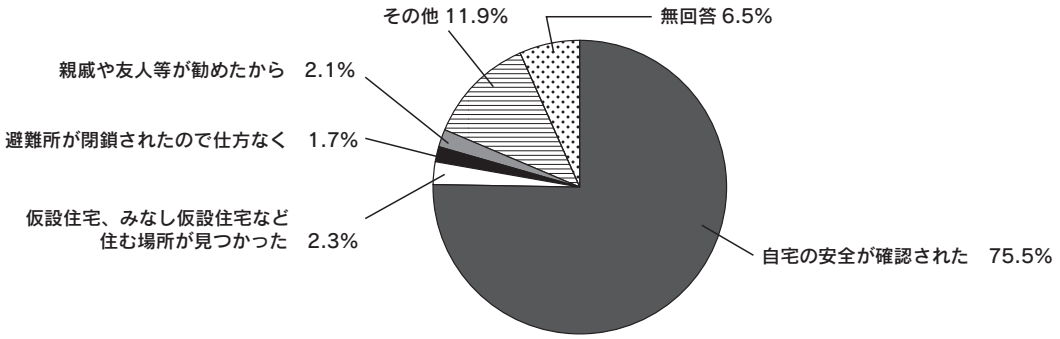
図 11



問４で避難所にいたと答えた人457人に、避難所にいた期間について聞いた。最も多い回答は「１週間以内」で67.4％（308人）、次いで「１週間以上２週間以内」が18.4％（84人）、「２週間以上１カ月以内」が4.8％（22人）となっている。ほぼ９割の人が２週間以内に避難所生活を切り上げている。なお、避難所で「１ヵ月以上3ヵ月以内」過ごした人は９人（2.0％）で、「３ヵ月以上」避難所にいた人は１人（0.2％）だった。**（図11）**

問４－２避難所から現在の場所に移られた理由を教えてください。

図 12　N=478



避難所からほかの場所へ移動した理由について聞いたところ、「自宅の安全が確認された」が75.5％（361人）で最も多く、次いで「その他」が11.9％（57人）となっている。**（図12）**

「その他」に挙げられた主な内容は以下の通りである。

・子どもが小さく、避難所で騒ぎ、怒られたので居づらくなった。

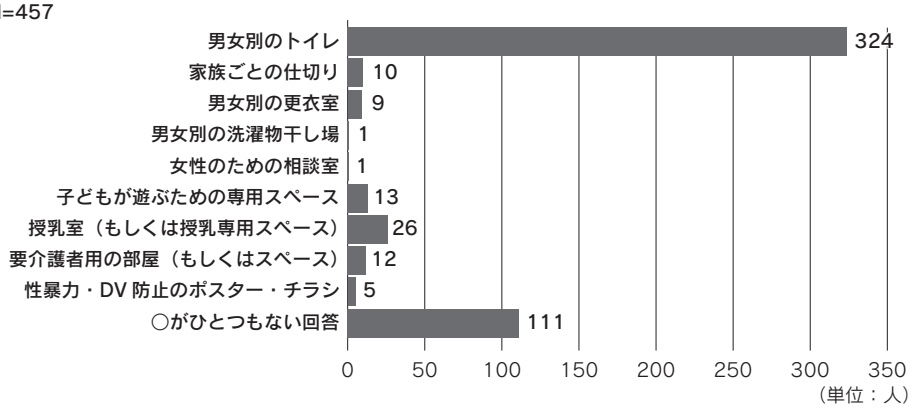
・子どもが感染性胃腸炎になったから。

・体調不良。

・動物アレルギーがあり、避難所の体育館に動物がたくさんいたから。
・臨月の妊婦だったが、避難所でノロウイルスが出たので。
・１歳の子ども（ハイハイする頃）の手に赤いブツブツが出来、衛生面が気になったため。
・自宅で水道が出るようになったので。
・余震が少なくなってきたから。
・通勤、通学に不便。

問４－３　あなたが入所した際、避難所にあったものに○をつけてください。（いくつでも）

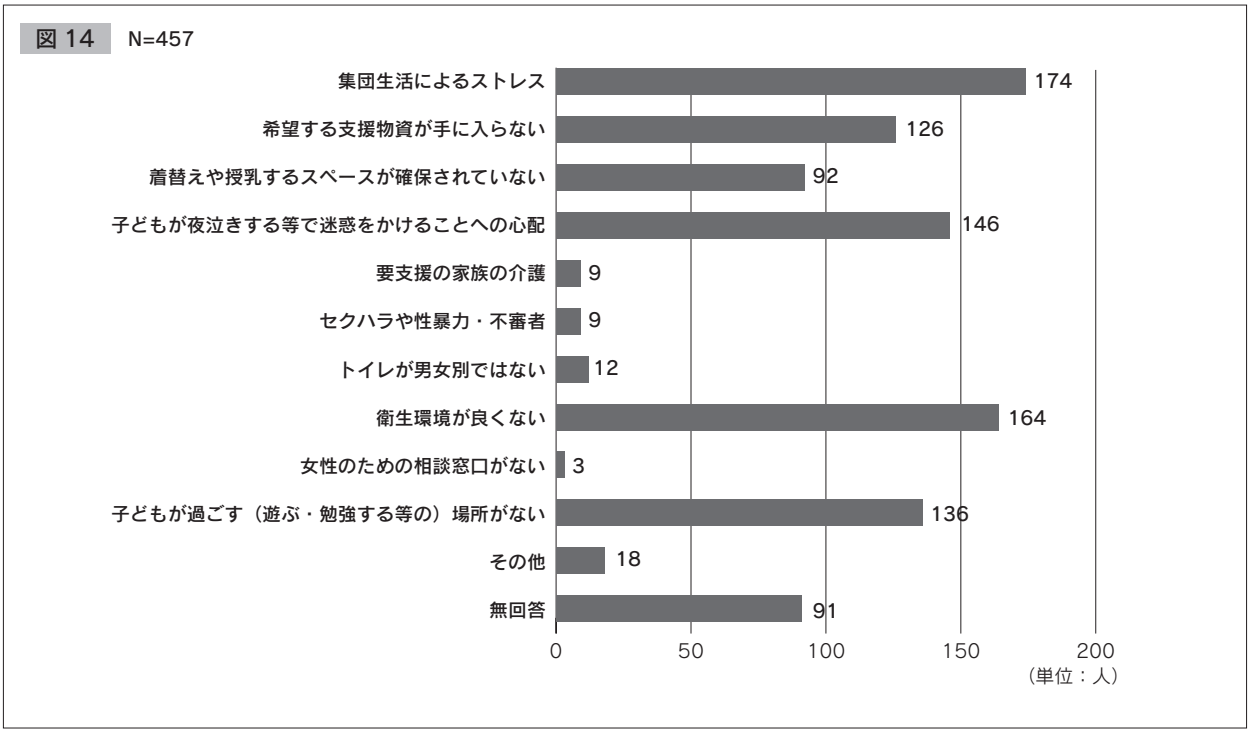
図 13　N=457



避難所運営における、男女共同参画の視点から必要と思われる各設備の設置状況についての設問で（避難所にいたと答えた457人の複数回答）最も多かった答えは、「男女別のトイレ」で324人（70.9％）、次に「授乳室（もしくは授乳専用のスペース）」が26人（５.7％）以下、13人（2.8％）の「子どもが遊ぶための専用スペース」、「要介護者用の部屋（もしくはスペース）」12人（2.6％）、「家族ごとの仕切り」10人（2.0％）や「男女別の更衣室」９人（1.8％）の順となっている。

男女別のトイレ以外に、男女共同参画の視点で配慮された設備等が設置されていた避難所は少なく、○がひとつもない回答の中には、「何もなかった」との記述もあった。はあもにいが独自に実施した避難所キャラバン等で配布した「性暴力・DV防止のポスター・チラシ」が掲示されていたことを確認していた人は、５人（1.0％）だった。**（図13）**ただし、避難所敷地内で車中泊をしていた人では、「避難所内にどのような設備があり、サービス等が提供されていたかを把握していなかった」との回答もあった。

問４－４　避難所での生活で不安・不便に感じたことは何ですか。（３つまで）



避難所における生活で不安・不便に感じたことについては、「集団生活によるストレス」を挙げた人が最も多く174人（38.1％）、次いで「衛生環境が良くない」164人（35.9％）、「子どもが夜泣きする等で迷惑をかけることへの心配」146人（31.9％）、「子どもが過ごす（遊ぶ・勉強する等の）場所がない」136人（29.8％）、「希望する支援物資が手に入らない」126人（27.6％）の順となっている。**（図14）**

「その他」の自由記載による主な回答は以下の通りである。

・指定避難所ではなかったため、建物内は老人優先でいっぱいになり、車中泊に。
・水などほしくても長時間並ばなければならず子どもがいると無理だった。
・夜でも電気がついたままで、子どもを寝かせるのに苦労した。
・１ヶ月の乳児がいる近くでタバコを吸う人がいた。
・妊娠中だったので急に何かが起こらないかと不安だった。
・一家族に生理用品が個包装二個だった。
・車中泊だったので支援物資などがいつ届いていて、何があるのかが分かりにくかった。

問４－５　避難所生活を経験して、あなたが「改善したほうが良い」と感じたことをお書き下さい。（自由記載）

避難所生活を経験して「改善したほうが良い」と感じたことについては、自由記載で聞いた。

「子どもを遊ばせる場所や道具など、子どものためのスペースを準備して欲しい」や家族ごとの仕切りを設けたり、授乳やおむつ替えコーナーを設けるなど、乳幼児のいる家族が過ごしやすい避難所を求める声が多かった。また、地震後、水が止まったことによるトイレの汚さ・不衛生さを指摘する声も多い。支援物資に関しては、離乳食や子どもの食べ物の不足と配布方法の改善を求める意見が多かった。運営に関し

ては、不審者対策や情報の伝達、掃除を当番制にする等の役割分担に課題を挙げる意見が多く、高齢者優先で妊婦や乳児を連れた家族への配慮がないことへの改善を求める意見も寄せられた。

〈自由記載の主な回答〉

【支援物資】

- 避難所によって差があるようだが、配給も炊き出しもなく、自宅に戻っても何も物資等がなかった。連絡もなかった。職場に休まず連日出勤したのでそこでちゃんとした食事が出た。仕事上、国からの米や物資等かなり余っていたので、見てびっくり。自治会を通して皆に届けるべきだと思う。
- すぐに、家族分の寝る用のマットと毛布、仕切りが欲しかった。
- 床に直に寝なくていいようにマット等があれば助かる。
- 支援物資が１日目の夜にやっと届いておにぎり１個。水やお茶、パンなど次の日の分まであると助かる。
- 支援物資をすべての小中学校に平等に分けてほしかった。余っているところはたくさん余っていたのに、何日も届かないところもあり、差がひどい。
- 支援物資がスムーズに被災者に届く仕組み、及び整備。プライバシーの確保。
- 指定避難所でない学校などに物資はほとんど来ず、どこが指定なのか分からなかった。
- 指定外の避難場所だった為、食事、水などの配給がなかった。別の場所へ配給を取りに行っても、行列が長く、子ども連れでは待ちきれず、受け取らないまま帰ることがほとんどだった。
- 離乳食がなくて大変困った。オムツを支援物資にいれた方が良い。
- 支援物資がおにぎりのみはきつかった。
- 支援物資を度々並んで受け取る事。お年寄りが長時間立つのは辛い。並んでも受け取れなかった。次は並んでいた人を優先して受け取るようにしてほしかった。
- 支援物資が早い者勝ちで行き渡らず、毛布を何枚も一人占めする人がいた。管理と優先順位（子ども、お年寄り等）をつけた配布がなされていなかった。
- 食事・支援物資が並んだ人しかもらえず、子連れ家族や歩行困難者への配慮がなく、左記の人達は並べず、もらえなかった。
- 食べ物がなく支援物資はあてにならない。支給されるのは子どもが食べにくいような菓子パンが１日１個でご飯は全くない。自分で買いに行っても行列で手に入らずようやく白米のみ手に入った。
- 食事の物資がひどかった。ほかの避難所との食事の質が違った。人数に対して１食分が少なかった。
- 食事はボロボロになった家に食材を取りに行っていた。食事は大切と思う。日持ちするものの支援が欲しかった。
- 支援物資がなかなか届かず、小さな避難所だった為、子どもの食べ物・飲み物に困った。そうかと思ったら、数日後、余るほどの物資が無駄に多く届き出した。
- 子どもが離乳食の時期だったが、避難所にはベビーフードなどはなく、子どもの食べ物をどうしようかと困った。乳児の為のものがもう少し整っていればなと感じた。
- 子どもが食べられる物の支給が少ない。避難所によって支給の内容や量が全く違うこと。
- 配布するご飯の時間が分かるようにする。配る場所や申告した人数分なのか、並んでいる人数分なのかも。
- 食事提供の時、ある家族は何度も列に並び、ひとり１食と言われているにも関わらずたくさんもらっている家族を見た。子どもやお年寄り優先にしたほうがいいと思った。多数の人が集まった避難所だったのに配られるものが少ない。
- 当時子どもが０歳と３歳だったが不在の時見守ってくれる人がいなかったため、食事をとりに行くことが大変だった。
- 小学校に避難して「おにぎりを配りますので〇〇へ並んでください」とアナウンスが流れたが子ども２人（当時１歳と３歳）を１人でみている状況だったので並ぶことができず食事が手に入らなかった。

【仕切り（弱者に配慮したスペース確保）】

- 高齢者や乳幼児への細やかなケア。個室の確保。（着替えや病人の為）
- プライバシーが守れる空間があってほしかった。
- 授乳中だったが、仕切りもなく、みんながいる場所での授乳でストレスを感じた。
- 子どものいる世帯とスペースを区切ってほしい。大人は昼間寝ている方が多いが、子どもは走り回ったり騒ぐためとても気を使った。
- 乳児のいる方は夜泣きでかなり気を使って気の毒だった。
- 高齢者、障害者、乳幼児等がいる家族への配慮。トイレが遠い、パーテーションが無い等が大きなストレスだった。
- 子どもが夜泣きした時に、体育館から出て外で抱っこし続けなければならず大変だった。
- 出来れば、子ども連れ家族は一緒の部屋にすると、迷惑をかけないのではと思った。
- 同じような家族構成や、似たような状況の人（妊婦、要

介護者等）ができるだけ同じ空間に居られるようにする。
- 子どもが小さいので気を使った。別に部屋が分けてあると安心だった。
- 家族ごとの仕切りは全ての避難所に必要だと思う。授乳スペースも。
- 当時４ヵ月の子どもがおり、泣いた時や授乳時等気まずかった。授乳時、家族専用の部屋が欲しかった。
- 授乳スペースがなかったので、赤ちゃんのいる家族がいなかった。

【衛生環境・健康】

- 熱があっても薬がもらえない。（市販の薬でいいから欲しかった）
- トイレなど水回りの衛生が大切。地震直後は水が止まったりしてトイレの水が流れず不衛生だった。
- 土足かそうでないかわからず不衛生。
- 避難場所の出入り口で喫煙する人が多く、喘息の子どもが心配だった。
- 避難所のトイレが汚く、不衛生。プールの水の使用マニュアルなど作ってほしい。
- 水がないのでトイレが不便でシャワーすら使えない。
- 掃除を当番制にする。（自分達が過ごした範囲だけでも清潔にする）
- ひとり一人がきれいに利用し、協力していく事が出来る姿勢があれば、少しは過ごしやすくなる。
- トイレは外で、停電中。雨が降っていて待ち時間に濡れた。男女兼用で手洗い場もなし。不衛生。
- 外のトイレは、水が止まっていたので仕方ないと思うが、大勢の人が使っていてそのままの状態で衛生的にも悪く、子どもを連れていきにくかった。
- 地震直後、（本震後２日間）水が届かず、子どもがおもらしなどして、手を洗いたくても洗えなかった。
- 中学校の避難所で、子どもが体育館をハイハイするが、衛生面がとても気になった。避難し約１週間後、手指消毒などの支援があったようだが、集団生活（避難指定場所）には必要だと思う。
- 衛生品の配布を知識のない子どもたちがしており、ウェットティッシュ等を素手で取り、別の袋に小分けにして配布していた。
- 臭いがすごくて気分が悪くなった。

【避難所運営】

- 小学校に避難したが、食事の配布も列など分かりにくく不平等なことが多く、もらえる人ともらえない人の差が激しかった。訓練などする際に逃げ方だけでなく、逃げた後のこともやっておいた方がいいと思った。
- 子どもがいる家族はうるさいので体育館から出ていってほしいと放送があった。（居づらくなり、みんな帰らないといけない状況になった）
- 誰がどのように指揮を執って運営しているのか分からず、改善したいことが伝えられなかった。
- 先に避難していた女性がルールを作り、耳の悪い父に対しても理解がなく車に戻った。
- 小さい子どもを連れてトイレなどに行かなくてはならず、仮設トイレは汚いので（あるだけありがたいが）大変だった。もし自分に小さい子どもがいなければ、トイレで用をたす間、子どもをみておくボランティアをしたい。
- 小学校の体育館で避難者が、子どもが騒ぐことに対し、大声でうるさいと怒鳴った。怒鳴られたことに子どもが恐怖を覚え車中泊するも夜泣きがひどかった。
- 小さい子どもがいる家族とそうでない家族を分けてもらえると不安や心配が減る。
- 高齢者優先で妊婦への対応が全くなかった。せめて把握だけでもしてもらえればありがたかった。
- 要介護者への支援がほとんどなかった。結局自分たちで病院へ相談し、入院できるようになったが、自分で病院まで行かなければならず大変だった。
- 校区の自治会長がすごく意地悪で、小さな子どもを見ているのに意地悪を言ってきて腹立たしかった。避難所をやめ、怖いけど自宅に戻った。
- 指定避難所が使えず、近くの避難所に行ったが、指定の避難所にしか炊き出しなどがなかった。
- 大家族が教室の広いスペースをとられていて、入れないので廊下に寝るしかなかった。廊下でも多くの人が寝ていたが、余震の度に窓ガラスが大きく揺れ音がし、子どももいたので、ほとんど眠れなかった。
- 小学校を避難所として使わせてもらったが、勝手に携帯の充電をしている人がいた。
- 体育館では、体が不自由な人や乳幼児に優先して床に敷くマットを使わせず、早いもの勝ちで勝手に使っていた。。
- 最初の地震時に小学校へすぐに避難したが、体育館が開くまでに時間がかかった。
- 避難所から仕事に行くと、戻ってきてから居場所がなかった。

【避難所内の設備】

- 高齢者用（車いす用）のトイレがなかったので不便そうだった。
- 電気が１日中ついていて子どもが眠れなかった。
- 女性と子どものスペースが必要。
- 洋式トイレでしか用を足せない小さな子ども、お年寄り、ハンディキャップが有る方等が沢山いる中、洋式トイレ（使用できるもの）が１つしかなくとても困った。（私も

持病持ちなので）
- 洋式のトイレが使えなかったり、数が少ないこと。
- とにかく狭くて、足をのばして寝るのがギリギリ、寝返りもできないような状態だった。スペースの確保をしてほしかった。
- 暑さ、寒さの対策。
- トイレ等の動線に問題があったり、授乳室がなく、障がい者や授乳中の女性への配慮が足りないと思った。
- 乳幼児のおむつ替えの場所、授乳、遊ぶ場所、洗濯する場所、干す場所。
- トイレにオムツや生理用品などを常に置いておくこと。母子避難の時、指定避難所ではないというだけで物資が届かない。
- 指定避難所は多くては入れない。お風呂に何日も入れなかった。
- 水の供給場所を増やしてほしかった。お風呂の提供がなかった。
- 母に片麻痺があり、歩行困難であったため、避難所まで車で移動する際や避難スペースも２階で介助が大変だった。

【役割分担】

- 役割分担をもっと上手にできたらよかった。常に毎回トイレ掃除をする男の子（中学生くらい）がいると思えば、何もしないゴロゴロしている人もいて、頑張り屋さんタイプの負担が大きいように思えた。
- 重労働は男性が行ったほうがいい。
- 性別による分業はある程度仕方ないと思う。男性は力仕事や危険な事をするなど、強制でなければ許容範囲だと思う。
- ボランティアのやり方。若くて元気に動けるような人に役割を与えるとか、もっと活用する。元気なのに食事の分配等で文句ばっかり言う人が多かった。
- 地域住民が進んで運営できるとよい。自分の仕事があった方が、高齢の避難者の精神衛生上もよいのではと思う。
- 小学校の避難所は、運営も何もできていない状態だった。シミュレーション等で役割分担等を決めておくといいと思った。
- おにぎりは時々ボランティアの学生が握ったため、硬くて美味しくなかった。避難者で食事作りが得意な人を、もっと有効に使った方が良いのでは。
- 被害者意識ばかり強く、与えられるのを待っている人が多かった。自ら動く人が少なく、一部の人ばかりに負担がかかった。

【子どもが過ごす環境・スペース】

- 子どもを遊ばせるスペースや道具を準備して欲しかった。できれば子どもを見てくれる保護者（信頼のおける人）のような人も配置してほしかった。
- 小学生の子どもが遊べる（トランプや将棋など）スペース（教室）を作ってほしかった。幼児がいる家族が昼間だけでも避難でき、遊べるところがあれば良いと思った。
- 授乳スペースや子どもが自由に遊べる場所がほしかった。
- 子どもが居やすい環境が欲しい。
- お年寄りは「子どもは飯はいらん」などおっしゃっていて、私の分を与える以外なかった。そういった方から離れられる子連れスペースが必要。
- 仕切り等がなかったため、子どもがうるさいと文句を言う人がいた。こういう時こそお互い様なのにと失望した。子どもがいる家庭を別スペースにする等の配慮があればと思う。
- 乳幼児がいる家庭には別のスペースが欲しかった。人目があり授乳やおむつ替えが難しかった。
- 避難所にたまたま子どもが遊ぶ部屋があったのに解放されなかった。
- 子どもがいる家族向けのスペースがあると、夜間のトイレ時も周囲に声かけて、1人は寝かせたまま行けるのでありがたい。

【安全対策】

- ２日目に東北の地震を経験したママ友からメールが来て、女の子を１人でトイレに行かせたり、遊ばせないようにと教えてもらった。メールが来なかったら気付かない内容だった。
- 夜中のミルク作りをするとき、フロアの隅に若い男の子たちが沢山いて少し怖かった。警備員とまでは言わないがそういう人が見回ったり、交代でいてくれると安心する。
- 集団での生活なのに自分勝手に発言し、自分の思うようにならないと大声で暴れ出し、ケンカにまで発展。警察までくる騒ぎになった。もう少し避難者の声を聞いてあげとけば、違ったのかなと感じた。
- トイレの衛生状態が悪く、小さな子どもを連れてトイレの個室に一緒に入る事が出来なかった。どこでもさわるので一緒に入れないが、誰かに連れていかれたら怖いと思い、なかなかトイレに行けなかった。見てもらえる誰かがいなかった。

【情報】

- 館内放送が聞きづらく困った。
- 耳が聞こえないため情報がまったく入らなかった。スーパーや学校、避難所のアナウンスが聞こえないため、情報が入ってくるのが遅かった。
- 市からの指示が一斉に各施設へと伝達しているのか疑問に思うことが多々あった。特に情報が錯綜していて混乱を招いていた。

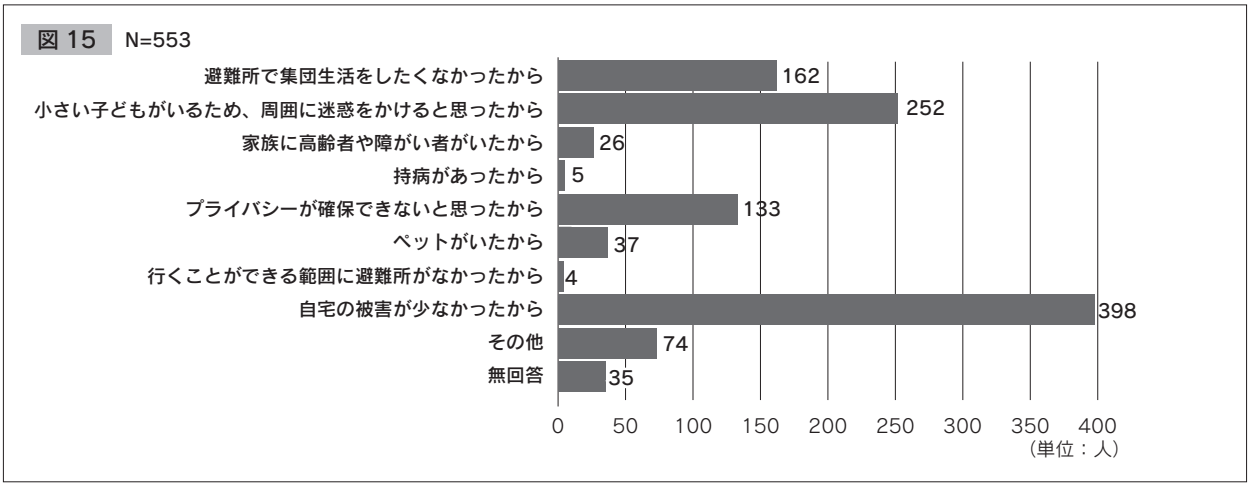
- 情報が全くなく、市の職員に聞いても分からないと言われた。ラジオでも良いから情報源が欲しかった。
- 掲示板などで、不審者情報や支援物資など最新の情報が欲しかった。
- SNS等は情報が錯綜していて、何が正しいのか区別がつかなかった。
- ちゃんとした情報を教えてくれる人がいてほしかった。
- 支援物資には頼らず、自分達でスーパーが開いている所を探して食べ物や水を調達した。災害の時に何がどこにあるかという情報をもっとしっかり把握しておけばよかった。車の渋滞で時間がとてもかかるし、何でも早い者順になるのが大変だった。
- 自分が今必要としている物などを張り出す「掲示板」のようなものがあればいいと思った。
- 子どもの遊び場、お風呂などの情報が欲しかった。

【その他】

- 指定避難場所ではないからと言って、職員の対応がものすごく悪かった。えがお健康スタジアムにたくさんの物資があったのに貰えなかった。
- スーパーの駐車場内で車中泊だったため、小さい子ども２人をひとりであやすことに大変さを感じた。上の子のオムツの手持ちがなくなり、スーパーの方にかけ合ったが対応困難ということで、人目の付きにくい屋外で排泄したが、初めてで、服や足、くつを濡らしてしまって大変だった。
- ペットにも配慮。
- 施設での生活は思いやりと助け合いで乗り切っていたので、これといって思い出せない。

＜自宅にとどまった理由＞

問４－６　自宅または敷地内で過ごされた理由を教えてください。（いくつでも）



自宅または自宅の敷地内で過ごした人の総数は553人。その理由で最も多かった回答は「自宅の被害が少なかったから」が398人（72.0%）だが「避難所で集団生活をしたくなかったから」162人（29.3%）、「プライバシーが確保できないと思ったから」133人（24.1%）など、避難所の環境イメージが良くないことで、自宅にとどまった人も多い。一方で、避難所に行きたかったにもかかわらずとどまったというケースは、指定避難所では被災者が多く、全員を収容しきれなかった状況があったほか、問４－４にも関連していて、「小さい子どもがいるため、周囲に迷惑をかけると思ったから」252人（45.6%）、「ペットがいたから」37人（6.7%）、「家族に高齢者や障がい者がいたから」26人（4.7%）など、自制したり他に配慮・遠慮したとの回答がある。乳幼児や要支援者（病気や障がいを持った家族）等がいる場合は、専用のコーナーや別室で対応することが必要とされていることが分かる。**（図15）**

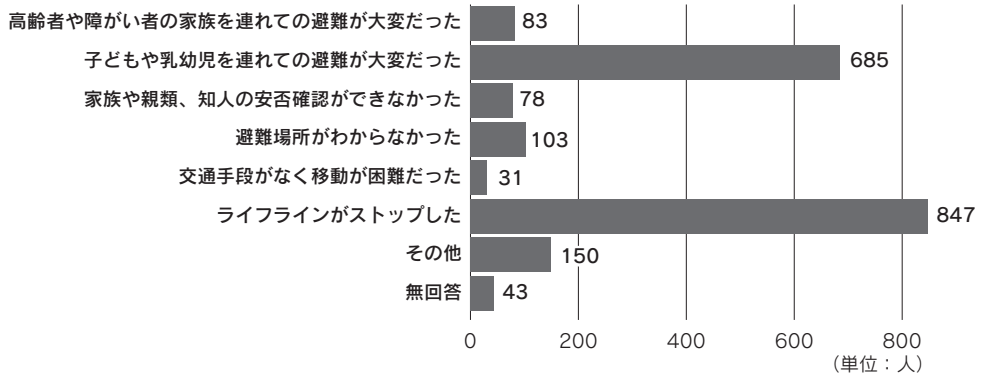
「その他」の回答として、以下のような具体的な記述があった。

・出産前で動くのがつらかった。
・妊娠中のストレスを増やしたくなかった。
・妊娠中で衛生面が不安だった。
・出産直後で避難所に行くのが厳しかった。
・ミルク・離乳食の準備が厳しいと思ったから。
・避難所はトイレ、夜泣き、授乳の心配があり、いける気分にならなかった。
・離乳食中で避難所で子どもの食料が確保できないと思った。
・避難所に人が多く、子どもが三人もいたため、はぐれる可能性があったため入らなかった。
・避難所に入れなかった。（入れずに追い出されたと聞いたから）
・避難所の駐車場もいっぱいで、とりあえず家の敷地で過ごした。
・避難所の受け入れ態勢が整っていなかった。
・避難所に自宅以上のものがなかった（水・食料・毛布等何もなく場所のみの提供だった）。情報がなく、どこへ行っていいかも分からず、どこも人がいっぱいとウワサをきいたので。
・自宅周辺に高齢者が多く、避難所へ行かず自宅で過ごされていたため、食料や水の確保をお手伝いしていたため離れることができなかった。
・祖父母が自宅にとどまり、私は勝手な行動ができなかった。
・集合住宅でほとんどの世帯が庭で過ごしていたため、その方が心強かった。
・近所で助け合うことが出来たから。
・自宅の見張り（泥棒防止等）。
・子どもを心ない大人から守るため。
・子どもが感染症になり、周りの人に移すといけないから。
・子どもにトラウマをもたせたくないので、できるだけ刺激になることを減らしたかった。
・どの程度で避難すべきか悩み、夜中だったため子どもも寝ており、避難することを決断できなかった。

5 被災によって抱えた困難

問5 2回目の地震直後に、直面した困難にはどのようなことがありましたか。（いくつでも）

図 16 N=1168

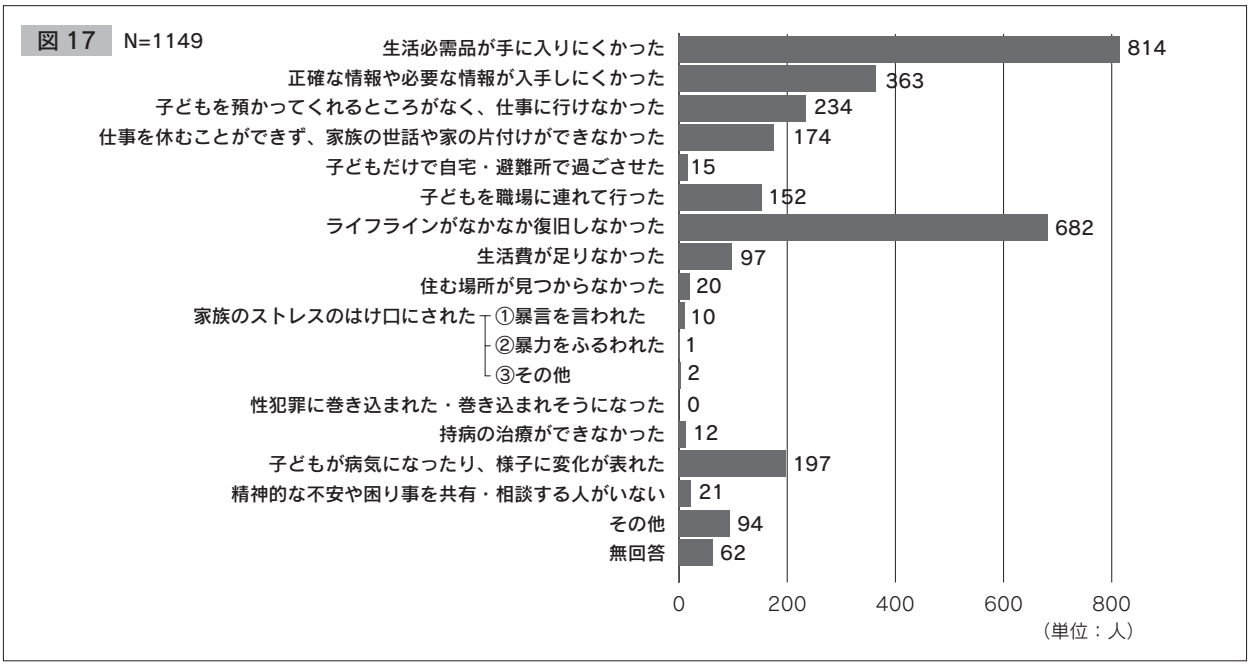


最も多かったのは「ライフラインがストップした」で847人で72.5％を占める。次いで、「子どもや乳幼児を連れての避難が大変だった」685人（58.6％）、「避難場所がわからなかった」が３番目に多く103人（8.8％）となっている。**（図16）**

「その他」150人（12.8％）に回答のあった主な内容は、以下の通りである。

・避難所に行ったが、乳幼児と障がい児連れはとても入れなかった。
・子どもの恐怖を鎮めること。
・３人目妊娠中でトイレを我慢するのが辛かった。
・内臓系の難病でトイレの回数が多いのになかなか使用できず困った。
・夫が単身赴任先から帰ってこれず、臨月なのに一人で４歳児を守れるか不安だった。
・両親が体調を崩し、車中泊での世話が大変。
・両親ともに仕事をしなければならないのに、子どもを預かる制度が全くなかったこと。
・発災直後から仕事に行く必要があり子どもを見る人がいなかったこと。
・子どもを置いて仕事にいくこと。
・本当に重要な情報の入手。
・地震後どのようにしたらよいのか公的な情報が少なく不安に感じた。
・団地住まいだが、放送が聞こえない、聞き取りづらい。
・街灯がなく、道が見えなくて石垣が崩落しているのに気がつかなかった。
・津波警報が出たが、どこに行けばよいのか分からなかった。
・交通渋滞がひどかった。
・ペットを連れての避難。

問６　地震後の生活で、あなたはどのような困難に直面しましたか。（いくつでも）



地震後の生活における困難について回答のあった1149人中、最も多かったのは、「生活必需品が手に入りにくかった」で814人（70.8%）が物資の調達に困難を感じている。次いで、「ライフラインがなかなか復旧しなかった」が682人（59.4%）とほぼ6割の人が水や電気・ガスがなかなか復旧しなかったことで困っている。以下、「正確な情報や必要な情報が入手しにくかった」363人（31.6%）、「子どもを預かってくれるところがなく、仕事に行けなかった」234人（20.4%）、「子どもを職場に連れて行った」152人（13.2%）、「子どもだけで自宅・避難所で過ごさせた」15人（1.3%）と、子どもの居場所、預け場所に困難を生じていることが分かる。一方、「子どもが病気になったり、様子に変化が表れた」197人（17.1%）や「仕事を休むことができず、家族の世話や家の片付けができなかった」174人（15.1%）ことに多くの人が困難を感じている。

少数派ではあるが、「生活費が足りなかった」97人（8.4%）、「住む場所が見つからなかった」20人（1.7%）などの回答もあった。**（図17）**

「その他」94人（8.2%）の自由記述に挙げられた主な内容は、以下の通り。

・家で家族以外の親戚と生活することになりストレスを感じた。
・地震で精神的に参っているのに、気丈な振りをして子どもの世話をしなければならないことに困難さを感じ、不眠や過剰に敏感になったりしていた。
・泥棒や強盗の情報で女性だけの車中泊も怖くなった。
・地震後の片づけや子どもの面倒を頼んだことで祖母の持病が悪化し、入院した。
・赤ちゃんを清潔に保つことができなかった。
・仕事を休めなかったため、子どもを県外の実家に預けたが、精神的に辛く、心配した。
・妊娠6か月で子どもも歩くことができず、給水に行くことができなかった。
・夫の事業所が休業になり、急遽県外へ出張することとなり、3人の子どもを私ひとりで守らなくてはならず、不安な毎日を過ごした。
・不眠とストレスで体調を崩した。
・出産を翌月に控えていたのに、自宅に戻れず準備が整わず不安だった。
・繰り返す余震や、一日中鳴り響くヘリコプターの音がすごくストレスだった。
・デマ情報なども出回り、不安をあおられた。
・自宅が全壊し、親子で不安だったが、子どもが不安にならないように、なるべく平常心を保つように心掛けたがきつかった。
・子どもが家に入るのを嫌がって入らない！
・夫がエコノミークラス症候群になった。
・大人も情緒不安定になった。
・配給はあったが、子連れで、私ひとりで何時間も待つことができなかった。
・避難所生活中に子どもが喘息になって心配した。連日病院を受診した。
・膀胱炎になった。
・2週間後に流産した。
・子どもが不安がってよく泣いたり、心のバランスが崩れてしまった。

・子どもを遊ばせる所がほとんどなかった。
・仕事を休めず、支援物資を取りに行けなかった為まともな食事が出来なかった。生活費も減り、何のために仕事をしているのか分からなくなった。
・また大きな地震が来るのではと、いつも不安だった。

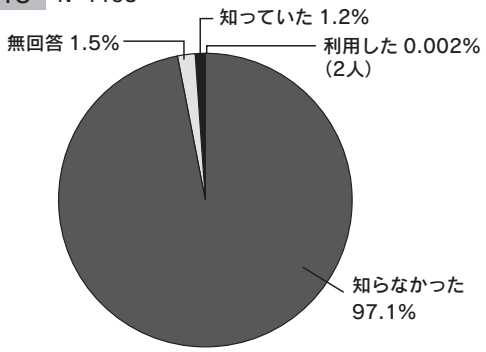
余震への不安に加え、避難所生活や親族との同居による環境の変化で強いストレスを感じたり、実際に病気にかかったり、早産や流産したケースもある。職業によっては、自分の家族や自宅のことを差し置いても出社し、勤務することが求められた人も少なくない。

妊娠中や出産直後に、パートナーが仕事のためそばにいなかったことによる不安やストレスを非常に感じたとする回答も多かった。

問７　男女共同参画センターはあもにいでは「親子ルーム」を開設していましたがご存知でしたか。

はあもにいが開設した「親子ルーム」について、「知っていた」人が15人（1.3%）、「利用した」人は2人だった。情報の入手先は、「幼稚園」、「インターネット」、「ホームページ（HP）」、「テレビのニュース」、「テレビを見た知人から」となっている。(図18)

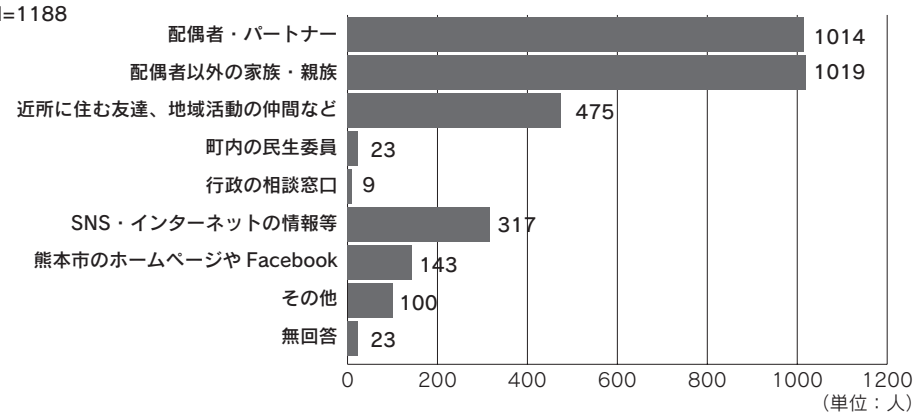
図 18　N=1193



＜頼りにしたもの＞

問８　地震の後、様々な困難が生じたとき、あるいは不安を感じた際、頼りにしたものは何ですか？(いくつでも)

図 19　N=1188



地震の後、困難や不安を感じた際、頼りにしたものについて聞いた。（複数回答）

最も多かったのは「配偶者以外の家族・親族」の1019人（85.8%）、次いで「配偶者・パートナー」の1014人（85.4%）、「近所に住む友達、地域活動の仲間など」が475人（40.0%）、「SNS・インターネッ

トの情報等」が317人（26.7％）と続いている。「熊本市のホームページ（HP）やFacebook」は、143人（12.0％）で、そのほか、「町内の民生委員」23人（1.9％）を頼ったり「行政の相談窓口」に行った人も9人（0.8％）いた。**（図19）**

「その他」100人（8.4％）の自由記述には、以下のような回答があった。

・職場の上司・同僚。
・会社・勤務先からの支援。
・職場の仲間との情報交換。
・職場のカウンセラー。
・職場の育児経験者の人。
・通っていた保育園の先生方。
・大家さん。
・同じ町内の公民館に避難していた人々。
・消防団の人達。
・自衛隊の方、ボランティアの方。
・避難所先で知り合った方々（学校の先生など）。
・ラジオ・テレビ。
・他県の友達からの情報。
・県内外の友人。
・大西市長のTwitter。
・高校同級生のライングループ。
・子どもの元気、猫の平常心。

問９　地震を経験して、現在あなたが困っていることがあったらお書きください。

熊本地震後、今、困っていることについて「家族」「地域」「仕事」「健康」の４分野について聞いた。（いずれも自由記載）

「家族について」最も多かったのが、「子ども」に関する内容で、揺れや物音に敏感になり、ひとりでトイレに行けなくなったり、チックやPTSDの症状を呈するなど、トラウマから回復できるか心配する声も多く寄せられた。また、妊娠中だった女性からは、地震及びその後の避難生活の影響が子どもに出ないか心配する内容もあった。各項目の主な回答は以下の通りである。

（１）家族について

【子ども】

●子どもにチックやPTSDの症状が出た。
●小学生の子どもがひとりでトイレに行ったりすることを怖がっているので、授業で地震や津波について教えてもらって正しい知識を与えてもらえたらと思う。
●ひとりでいることを怖がるようになった。特に夜は少しの時間もひとりを嫌がる。
●小２の息子が、いまだにひとりで家の中にいたがらない。隣の部屋やトイレにひとりで行けないこと。
●４歳の娘のじんましんが始まった。揺れると怖がる。
●地震後子どもにチックがでるなどして病院にかかった。１年以上たった今でもストレスでチックが出てくる。
●子どもが小さな地震でも異常に怖がり、ひとりでいることが不安になっているようだ。

●６歳になる年長の子どもが暗い場所を怖がる。ひとりで２階に上がれない。
●子どもが少しの物音でも怖がるようになった。
●子どもの自立心が芽生えない。登下校も送迎が必要。
●息子が不安からか２ヶ月ほど幼児返りをしたこと。不登園、つめかみ、夜泣き、チックが見られた。
●子どもが少しの揺れも怖がるようになり、とても甘える事が多くなった。
●子どもが不安定。
●子どもが外泊を嫌がるようになったこと。
●TVをみてニュース速報が流れたら少し不安な顔になったりする。
●子どもが少しの揺れやニュース速報の音に敏感になった。地震後しばらくの日数、抱っこから降りようとしなかった。未就園児の心のケア等の専門の方が欲しい。
●子どもが夜寝るときに「地震が来たらどうしよう」と不安になってなかなか眠れない時がある。（大雨や雷から思い出した様子）トイレについていかないといけない。
●トラウマを抱えている。
●子どもがユニットバスがトラウマでパニックを起こしていた。
●自然災害や地震に子どもが敏感になった。
●子どもの寝つきが悪い。
●一緒に寝るようになった。
●２歳の子が友達に意地悪をする事が増えた。
●子どもが自転車が倒れているのを嫌がるようになった。
●現在４歳の長男が、震災後にトイレを怖がるようになった。馴れない場所での排尿が難しく、トレーニング中。
●いまでも時々ある大きめの地震で子どもがおびえて吐く。大きな雷でも吐くようになり、怖いが「吐く」という行動に癖がついているようで怖い。
●子どもが一階で寝るようになった。
●子どもが便秘になった。ちょっと揺れると血相を変えて走ってくる。
●大きな音に敏感に。母親と離れると怖がる。
●小学３年生の子どもが２階の子ども部屋にひとりで行けなくなった。留守番もできなくなり、させるのも不安になった。５歳児は時々怖い夢を見るようでうなされたり、夜泣きしたりするようになった。ひとりでトイレに行けなくなった。
●地震でなくても戸がガタガタするだけで子どもが怖がって走って飛びついてくる。地震の際、傷ついた床や扉を見ると、「地震きたね、怖いね」といまだに言う。
●今でも地震があると子どもは気にし「準備してる？ぼくのもしてる？」と聞かれる。
●子どものトラウマが消えるか心配。
●校区外から通ったりしているので、子どもが友達と遊べない。
●今年子どもが小学校にあがったが、仮住まいで狭いため、地震前のように家の中で好きなように過ごせない。同居していた家族が多かったので２ヶ所離れた場所に借りており、行き来が負担。
●校区外に引っ越したため、子どもの学校の送迎が毎日大変。
●下の子が、もともと泣き虫だったが、２歳になった今も何かあるとすぐに大泣きし、その泣き声にすごくイライラしてしまう。最初は我慢していたが、言う事を聞かなかったり、さらに大泣きすると耐えられず怒鳴ってしまう。
●息子がぜんそく持ちなので、病院が閉まっていると心配で不安になる。
●妊娠中だったので、地震の影響がないか心配している。
●自宅が半壊で解体することになったが、小学１年生の息子が通う校区内で引っ越し先の家が見つからず…できる限り近くで見つけたが…ひとりでの登下校が無理なので、送迎の交通手段、費用に困っている。

【夫不在での不安】

●夫が出張時や夜いない時、少し怖い時がある。
●３人家族で近くに頼れる親族もいない。夫の仕事の性質上いざというときは自分が仕事を休まざるを得ない。
●夫の職場が震災で一部機能しなくなり、約３年は単身赴任と思われる。産後１ヶ月で震災に遭い、両方の親には時々協力してもらっているものの、突然の夫不在の子育てに大変さを感じてしまう。子どもたちもさみしそう。
●夫が単身赴任中なので、また大きな地震が来たら子ども３人連れて逃げられるか心配。
●夫が仕事上、家にいない事もあるので、また地震が起きた際小さい子２人をかかえて逃げられるのか不安。また、夫は地震が起きたらすぐ仕事に行かなければならないし、親も県外のため不安がある。
●夫が消防団に入っていて地震直後から私たちと離れていた。地域の為ではあるが、夫の身の心配と義父がいるとはいえ、男手がそばにいないことで不安を感じた。
●夫が残業が増えたため、ワンオペ育児中。
●夫の仕事が忙しくなり、早く帰宅できなくなった。

【高齢の親】

●母のみなし仮設の期限。住宅再建など。
●高齢の父母と別々に暮らしているが、また地震など災害が起きたら心配だ。
●みなし仮設に移るのに、祖父母が別の住所になるので心配である。
●両親が益城町に住んでいたが地震で元の家に住めなくな

り、現在熊本市にある祖母の家に住んでいる。精神的に家を失った悲しみが強く、それが今後の老後生活に大きく影響すると思われることが心配。
- 両親がみなし仮設なので早く家に戻れたらいいと思う。
- 母が足を悪くしてしまい、その通院が大変。

【家族との仲】

- 夫は地震を直接経験しておらず、考え・感じ方の違いが顕著となった。
- 夫が２回目の地震の時、ひとりで一番に逃げてしまい３人の子どもを妻の私がひとりで避難させるのが大変だった。
- 地震をきっかけに、夫と不仲になった。
- 身内のところに避難していたが、子連れであったため身内もストレスを大きく感じて、関係性が悪くなった。
- 家がみつからず、親と同居していてストレス。

（２）地域について

【復旧が進まない】

- 団地の改修工事が中々進まない。生活には問題ないが建物にひびが入ったり、地面がぼこぼこしている。
- 近所に今にも倒れそうな古民家があり道も狭いので心配。
- 周りの建物が崩れかけて危険だったりするので子どもが通学するのに危ない。
- いまだに崩れたところや崩れそうな壁を直していないところがあり危険。
- 道路のヒビや段差などまだ直っていない箇所があり、車での移動中、徒歩でヒヤッとすることがある。
- 復旧していない道路があり交通が不便。
- 近所に壊れかけている家があるので今後の台風などでの被害が怖い。
- 近所の崩落した石垣がそのままになっていること。石が落ちてきたらと考えると怖い。
- 隣の家のブロックが倒れたまま放置してあり、それなりに人通りがある場所なので撤去して欲しい、地震により危険になった場所をどうにかして欲しい。
- 現在も通行止めの道路があり、渋滞が起こりやすく困っている。
- アパートの周りで一気に工事しているためアパートに入る道がない。
- 子どもの登下校に使う通学路の途中の山が地震で少し崩れ落ちた。その後、雨が降る度にその場所を通らせるのが怖い。
- いつ倒壊するかわからない建物がたくさん残っている。台風などのシーズンや、また地震がきたらと心配。区役所に相談したが、家主にどうにかしてもらうしかないと言われた。道路にも瓦や塀が今でもくずれてきている。
- 液状化地区で地域全体が被害を受けている。
- 商業施設・家の解体工事の騒音と揺れ。
- 隣の家が公費解体となったが、下請けの下請け（？）で、お金が足りないのか足場が雑に組まれていたりして、自宅のカーポート、塀に被害を受けた。話し合い中。
- 同じ校区でもライフラインの復旧に差がある。
- 地盤調査を無料でしてほしい。

【避難所のこと】

- 指定避難所がどこかはっきり分からない。
- 新しい住宅地のため、災害時の避難場所の情報がほとんど無い。
- 避難所がはっきり分からないし、利用しようとしても自宅から遠いので、必要な時に本当に使えるのかわからない。
- 指定されていた避難所が機能しなかったので、今後災害の際、再度その避難所に避難可能なのかわからない。
- 避難所に集まった人が民生委員さんのおかげでいろいろ助かっていたのに、若い方がボランティア活動してくれるということがほとんどなかった。民生委員さんは年配の方が多くとても疲れていらっしゃった。
- 消防団や民生委員の方にはお世話になったが、みんなが食べ物や水がなくて困っていた状況の中、知り合いの人に多く配ったり、あとになり「自分たちはお世話をしていたから水も食事も好きなだけとれた」などと話しているのを聞くと残念に思う。きちんとガイドライン的なものを作ってほしい。
- 支援物資の管理をする自治会長がきちんと住民に行き渡るよう管理できていなかった点は今後改善してほしい。

【住民同士のコミュニケーション】

- 地域の人とのコミュニケーションがないため、TVでの情報が中心なのでもっと地震に関する情報を熊本市のみのものでもいいので携帯での情報がほしい。
- 団地の放送が聞こえない。家の中で聞こえるスピーカーがあればいいと思う。
- 防災訓練など地域防災に関わる取り組みが少ない。マンションが多い地域のため、顔を知らない。
- 周囲の方の顔と名前も一致しないため、コミュニティ等といわれても存在しないと思う。
- 高齢者が多い町内なので、地震が来た時に避難ができない人の把握をしていかなければいけないと思う。
- 地震のため、職場が移転したので保育園の送迎ができなくなり、他の保護者との交流が少なくなった。
- 校区外に住んでいるため、地域のことが何も分からない。

●壊れた神社が何カ所もあり、その修繕費を寄付と言いながら金額も12,000円以上と指定し、町内会費と支払日も合わせて強制的に集めようとしている。

【子どもの通学・通園・遊び場】

●仮住まい中で、今年から小学校に入学した子どもが校区外通学しているので送迎している。近所のお友達と遊ぶなど交流ができていない。
●来年度から小学校に入学するが、修理中の自宅と現在の社宅では校区が違うため、通学手段をどうするか、考えなくてはならない。
●元々住んでいた校区に早く戻りたいが、アパートなどの空きもあまりなく、売地も少ないので小学校卒業、卒園までに戻れるか焦りと不安がある。
●子どもが遊べるところが少ない。
●地元にあるスポーツ施設が地震によって使えなくなったこと。

【その他】

●神社等の再建の為のお金の協力要請をアパート住まいでいずれ引っ越すので免除してほしい。
●公衆電話が少ないこと。震災の時、携帯電話がつながらない状態だったため、子ども達だけで留守番をしている時に地震になったら連絡の手段がないと思った。（キッズケータイは持っているが…）
●地震でお店が結構なくなり、買い物が不便。

（3）仕事について

【休めない・激務になった】

●地震後仕事が忙しく、残業が続いていてなかなか早く帰宅できない。
●地震のため仕事量が増え心身共に疲労している。
●離職者が増え、パートの時間が増え、忙しく感じることが多い。
●震災復旧で仕事が増え、家庭（親の介護と子育て）と仕事の両立が難しくなった。休みづらくなり、土日も働いている。
●被災したが仕事が休めず体がきつかった。
●病院勤務なので休めなかった。お互い被災者だが、自らが被災者であるということを忘れていた。そのあとずっと業務が続き、走り続けている感じ。
●発災後から、数ヶ月残業が続き、睡眠時間も確保出来ない状態であった。

【転職・離職】

●正社員だったが、義母が震災以降、保育園後の孫の預かりに自信をなくし預かってくれないので、パートへ変更せざる得なくなり、今までのキャリアを失った。
●地震があった次の日でも朝６時半出勤だった。厳しく、新しく仕事を探すことになった。
●また地震が起きたらと思うと自宅と職場が近い所がいいと思い、職場や勤務形態を変更した。
●勤務先の変更を強いられ、生活パターンが変わった。
●校区外で子どもの送迎もあるため、仕事の時間が制限され、長くは働けなくなった。
●転職を考えている。
●ますます再就職が心配になった。

【不安な気持ち】

●万が一、同じような地震があったとき、子どもと離れ、子どもを不安にさせたまま仕事にでることに強い不安を感じる。職業上の役割との葛藤が辛かった。保育園を早く開園していただき大変助かったが、親自身が不安なとき、（被災直後）職場内に一時預かれる環境（大きく揺れたとき、すぐに子どもの状況を確認できる所）があればいいと思う。
●看護師として働いており夜勤の際はとても怖かった。現在は平常に勤務しているが、当初は、夜不在になることが不安だったと思う。
●仕事（介護）がら休むのが難しいため、今後同じような災害時どうしたらいいのか不安。
●福祉関係で仕事をしているため、災害の時休むわけにはいかない状況だった。家族（子ども）と離れて仕事をするのは心配。
●職場が病院だと、家族より仕事が優先になってしまう。（両親とも医療従事者だと子どもを見られない）
●仕事の内容が変わり、勤務時間も変わったため、家庭との両立が難しく、ゆとりをもって子どもと接することができなくなってきた。

【子どもの預け先がない】

●子どものいる母親に震災時は配慮してほしい。休園に伴う緊急託児所の配置。
●災害があっても休める仕事ではないので、保育園が休園したらどうしようという不安がある。
●災害時には、家族をおいて職場にいかなければならないので子どもをみてもらうところがない。
●夫婦とも公務員のため、仕事を休めないので子どもをどうするか困った。実家の母に預かってもらったが、県外なので様子を見ることもできず。また同じことがと考え

ると悩む。
- 仕事がら、大災害があればすぐ出勤なのでその時の子どもの預け先確保が不安。
- 看護師をしており震度５以上の時は出勤しなくてはいけないが、小さい子どもを預ける場所もない。そして本当は離れたくない。今も課題として残っている。

【育児休業・仕事復帰】

- 現在、職場が再建中で、大多数の職員は現在も派遣先で勤務中。私は育児休業中で、仕事に復帰したいが、現状はなかなか厳しく育休を延期している。育休２年目からは手当てもなくなるので、貯金を崩しながらの生活であり、正直苦しい。
- 子どもがやっと入園できて一ヶ月過ぎたが、まだ幼稚園児なのでまだまだ仕事はできそうにない。
- 自身の体調不良（産後６ヶ月～）と地震も重なり（地震日に益城町へ引越）、育児休業からの仕事復帰が遅れたことにより、昇進に影響した。
- 現在育休中。この生活のまま復帰しなければいけない事への不安がある。
- 今回は育休中だったので、子どもの面では助かったが、地震で（災害時）呼び出し等があるのに、出られないことが申し訳ないと思うところもある。

【職場での理解、トラブル】

- 地震後、保育園が休みのため、仕事を休むことが「地域社会へ貢献していない」ように上司に評価され、私も被災者なのにと、心底腹が立った。辞めたいと思った。
- 当時、妊婦だったためか、他の職員と同様の仕事をしないように言われ、皆が出かけていくのに、私は事務所で別の仕事をした。自分にできることをしたつもりだが、皆と同じようにできなかった自分がとても不甲斐なく、疎外感をとても感じ、今でもその時のもやもやが残っている。地震の時、私から職場や上司に連絡すべきだったが、自分のことで精一杯で、それもできなかったこと、また職場からも連絡がなかったこと（妊婦だから呼び出さないでおこうと配慮されたのか…？）も気になっていて、時々思い出し、憂鬱になる。

【配偶者（夫）の仕事の影響】

- 夫の仕事が忙しくなったため、フルタイム勤務ができない。
- 夫の仕事が忙しくなりすぎて、在宅時間が短く子どもの世話を手伝ってもらえない。
- 夫の仕事が激務になった。平日は夜中まで残業。職員の数に対して仕事が多く、追いつかない現状とのこと。それに伴い、自分の育児、家事の割合が高くなり仕事から帰宅後、寝かしつけるまでがしんどく、憂鬱。結局、女性が仕事を持っていても子育てや家事は母親が担い、男性のほうが仕事をする雰囲気になっている気がする。（仕事の種類や役職でも異なると思うが）
- 地震後、夫も職場が損壊し、現在は派遣での勤務。環境、人間関係が大きく変化し、とてもストレスを感じている様子。この状況があと２年は続くので、精神的に病まないか心配している。

【災害時の休暇制度】

- 夫婦どちらかが、子どもと過ごせる制度をつくって欲しい。
- 自分たちで家を直したいと思うが、仕事が休めないため時間が取れない。
- 仕事が休みづらい環境で（避難所勤務ということもあり）我が子を放置せざる得ない状況で、十分対応できなかった自分が追いつめられ、精神的につらかった。相談したくても、時間的にも精神的にも追い詰められて無気力になってしまったが、配慮がもらえる職場ではない「（子育てもあるだろうが）みんな大変な思いは同じ」という風潮が強く、子育てしている者が自業自得という感じである。
- 震災で自宅が住めなくなり、すぐに出勤できる状況でなかったが、休んだ分は全て有休もしくは欠勤となったため、後の休みが減った。

【渋滞などの影響】

- 仕事場が遠く、毎日何時間も渋滞して辛かった。
- 災害復興工事で、いつもの道が通れず、時間がかかるため子どもを早くから保育園に預けなくてはならないこと。
- 夫の通勤時間が５時間程かかるので大変。
- 会社が車で１時間かかる距離のため、何かあった時すぐに子どもを迎えに行けない。

【自営業に影響】

- 自営業のレストランの客が減った。
- 住宅関係に勤めているが手続きの遅れや人手不足、商品の遅れなどでなかなか進まないのがはがゆい。
- 事業計画が前倒しになったのに再建が進まないこと。
- 自営、従業員を雇用したいが、地震があったことで、ちゃんと雇用していけるか不安はある。
- 収入が止まり、掛け持ちしていた会社も経営困難となり、災害後の対応が大変だった。

（4）健康について（身体的・精神的）

【揺れに敏感、ストレス、トラウマ、不安】

- また地震が来るかもと怖くて暗い所にいけない。
- 大型トラックが通るたびに家が揺れるのでドキッとする。
- 精神的にまた大きな地震があるんじゃないかと、まだ不安になる。
- 地震が来るたび不安で動けない。
- 不安になったり、また揺れたら家に住めなくなるのではと感じ、眠くなってもすぐ目が覚める。
- 余震にトラウマ。
- いまだに震度３くらいの地震が来るとドキドキする。
- 予期不安が起こり、息苦しくなるようになった。
- 夜、電気を消して眠れなくなった。（真っ暗にして、また地震が来たら…と思うと怖くて消せない）
- いつも不安で毎晩、地震予知のインターネットの情報をチェックして寝ることが続いている。震度２程度でも揺れる際にミシミシと家が鳴ると動悸がする。
- 普段は何ともないが、砂利道を車が通るときに、聞こえてくる音にドキッとする。（地震が起こる前に聞こえる地鳴りの音に似ているから）
- 余震に敏感でストレスが溜まりやすい。物音でも驚きやすくなった。
- 今も夫が３泊・４泊と帰宅せず不在の日は身構える（前震の日もいなかったのでその恐怖もある）
- 地震が原因かどうかは分からないが、病気はないのに体調不良になることが増えた。不安になりやすくなり、心配性になった。
- 疲れやすい。不安だ。
- 地震が起こるとあの時の感覚がよみがえって、ほんの少しだけどパニックになりそうになる。
- 祖母の精神的安定がいまだ困難なため、周りも時々つられて、不安定になる。
- 地震後から夜寝付けなくなり、寝不足状態が続き、精神的に辛い。仕事も育児も休めないので、負担を軽く出来たらと思う。
- 地震後、ストレスと診断され体調不良が続いている。
- 地震にとても敏感になり、熊本地震の揺れのVTR等、一番大変で不安だった時のことを見たり思い出すと涙が出るときがある。
- 上の子を出産してから熟睡することが少なかったが、地震後、物音や、子どもが動いたり、たまにある余震で目がさえてしまいよく眠れない。
- 地震発生時、妊娠６ヶ月だったため、気持ちが不安定だったからか地震のほか、大雨や台風など天気が怖い。県外で地震など、さらに怖いので県外に行く気になれない。
- 父親の血圧が上がりめまい、不整脈などの病気が出た。
- 怒りっぽくなった。
- 地震後約２～３ヶ月後くらいから精神的に不安定になり、病院に通った。
- やっと気持ちが落ち着いてきたが、不安でしょうがなかった。今年５月ごろまで気持ちが沈むときが多かった。
- 地震以降、病院に行く気持ちになれないでいる。
- 夫婦共にうつになりかけた。
- 支援物資の届くような場所の情報はLINEで流れてきたが、外出する元気もなく、鬱っぽくなり、ママ友らと話すのも嫌だった。
- 地震後、精神的に弱くなったように感じる。すぐに悪い方へ考えてしまうようになったのは、地震後からだと思う。
- 身体的、精神的に一年以上不調。
- 地震後、身体的にも精神的にも調子がおかしくなり、戻らない。ゆっくりする暇もなく、このままずっとこの状態を抱えていかなければならないのか先が不安。
- ストレスで過敏性大腸炎。地震で骨を折り、二ヶ月入院した。
- ストレスで円形脱毛になった。めまいや手足のしびれがあり、ストレスがとれない。
- 熱が続いたりする。
- 家族が亡くなったり、家が無くなった訳ではないので、少しの不自由や怖さをあまり口に出来ない。そういう人は多いのではないか？と思う。

【持病の悪化、治らない】

- 地震後、以前からあった持病がひどくなり薬を飲むようになった。
- 地震前に体調を崩し、仕事を休んでいた。地震の影響で、職場が繁忙となり、仕事への復帰時期が遅れ、体調不良が長期化した。
- ゆっくりできず体調が毎日すぐれない。病気も治らない。

【出産等に影響】

- 地震後に出産したが、子どもに障がいがあり地震時のストレスが多少関わっているのではないかと思う。
- 地震によるものか分からないが、流産してしまい悲しくなった。でも、仕方のないことかなとも思う。今も、少しの揺れでも怖く感じる。
- 妊娠中で切迫早産になり、入院先がみつからず心配した。
- 地震後２回も流産した。

【避難時の健康・衛生面】

- 持病があり、体調を崩しやすいので避難所できれいなトイレがないと辛い。

●避難所にいた時から喘息になり通院中。去年は入院した。
●ライフラインがストップしたりして、当時は妊娠していたので色々と大変だった。
●難病を患っており日常的にトイレがないと厳しい生活をしているので、地震の際、避難することを考えると不安。
●精神的な病気に対しての通院保障がないこと。
●祖母が避難や車中泊の際の転倒や疲労で、地震直後から入院し、施設で暮らし始めることになったが、入院の直接の診断が地震によるものではないとされ、地震被災者として認定されない。母のストレスが増え、体調不良やイライラしていることが増えている。
●障がい児のヘルパーの申請を、地震後の財政難を理由に断られた。（申請をとり下げるよう勧められた）

（5）その他（生活再建や家計の問題等）

【罹災判定と支援】

●一部損壊の判定を受けたが、何の支援もないし控除も受けられない。すべての修理等を自費でしなければならないかと思うと家計的に厳しく躊躇せざるを得ない。
●マンションの修繕費が月々増え、負担である。一部損害ではほとんど何も出ず、困っている。
●家の傾き、窓、ドア、勝手口など修理個所はたくさんあるが、経済的に修理できない。一部損壊だったので支援に不満。
●新築５年目で、家があちこち壊れ、一部損傷のため全く経済的支援がなく、この悲しみ、怒り、虚しさをどこにぶつけたらいいのか、生きがいもなくなった。
●地震で壊れた家電等を購入したため、予想外の出費で家計が苦しくなった。一部損害判定のため、補助金等も全くなく、全て自費での処理は、余裕のない人にとってはとても厳しい。
●家の診断に納得がいかない。
●家が傾いているが、一部損壊としか判定されなかったので修理の目途が立たない。
●住宅、家財等の損害に対する行政の支援（減免等）情報が伝わってこなかった。半年、１年経って人づてで聞くことが多かった。
●地震前に自宅購入し、建てる時に地震が発生して、予想外の出費や住宅の完成予定が半年程遅れるなどで出費が生じたが、自分達で賄うしかなかった。（地震前契約で復興補助の対象住宅ではないため）
●半壊で家の建て直しをするが、日中は仕事なので手続きが大変だった。
●国民健康保険や水道料金などの免除申請ができることを知らなかったので払ってしまったものをもう一度手続きするのが大変だった。
●実家の母がひとりで傾いた家に住んでいる。公費解体をし、建て直したいが、支援金など手続きがもっとわかりやすかったらと思う。
●短期間で住所が２回変わったため手続きなどがいまだに追いついていない。
●建てた直後の地震でいまだに家の修理ができていない。ローンを払い始めたばかりなのに修理費用もかなり掛かりそうで、新築の家に関しての保証がなく困る。古い家の全壊などとはまったく違うもの。古くて壊れて公費などいろいろ保証があって羨ましく思ってしまう。瓦もまだ片付け終わっていないのに、自分たちだけで処理場に持っていくことは不可能に近い。
●実家が半壊の判定だったが、立て直してやる余裕がない。心苦しく心配。

【家の修理費用・資金不足】

●雨漏りがあり、修理が必要だが経済的に難しい状況。
●地震保険では家の修理代が足りない。
●地震の影響で家の再建を考えているが、解体費用も含めて払っていけるのか心配。子どもが小さいのと第二子が欲しいため。
●自宅に住めてはいるが、タイルの剥がれやクロスの剥がれなどそのままになっている。費用面やまた地震が来るかもしれないとの思いから修理はしておらず、家の資産価値もおちた。
●マンションの修繕積立費が倍額になった。
●マンションのひび等の補修費用がどうなるのか心配。
●被害が少なかったので補償もなく、地震保険にも加入していなかったので、修理の費用に困っている。
●家を建て直すことになったが支援金などでは全く賄えず、建築費の負担が重く、今後支払えるか不安。
●地震で自宅の外溝が壊れたが、経済的に直すゆとりがない。
●地震前にリフォームを考えていたが、地震によって補修箇所が増え資金不足で困難に。
●地震で受けた家の損壊がまだ直すことができていない。一部損壊で出たお金は休業した分の生活費に充てたので足りなかった。

【家がない】

●みなし仮設住宅で次のアパートが見つからない。新築で家賃が高い。みなし仮設の入居期間は何年延びるのか？
●地震前から進めてきたマイホームの建設がかなり遅れ、入居できない。
●震災後、地盤沈下し、引っ越しをしたくて物件を探している。
●以前住んでいたような平屋の一軒家賃貸の物件がない。

- 現在、みなし仮設に住んでいるが、もともと住んでいた地区に戻りたい。子どもが小学校に入学するので今年中に引っ越ししたいが、なかなか物件がない。
- 一時的に引っ越しをし、狭いアパートで暮らしている。地震後なかなか広い所へ引っ越せない。
- 現在みなし仮設に住んでいるが、期間内に引っ越しする場所が見つかるか不安。
- 物件を探しているが、地震後、物件の数が減り、条件に合う所がなかなか見つからない。
- ペットを連れて子どももいると、みなし仮設に入居できず、本当に困った。震災に遭うまで考えもしなかった家のリフォームにお金がかかることとなり、将来が不安。リフォームすることで夫も単身赴任になりそうで、生活も不安。
- 子どもが通う学校の校区内の近くに、家が早く建ってほしい。
- （以前の学校区とは違う場所の）みなし仮設に住んでいる。子どもの保育園も遠くなり、今通っている保育園の校区内の小学校に通わせたいと思っているが、引っ越すにも初期費用が必要になり何度も引っ越すのは大変である。現在の場所に長期的に住むつもりはない。
- 自宅に住めなくなった。
- 今、みなし仮設にいて、今後の事を考えなければならないこと。
- 自宅に戻れなくなっている。仮住まいをみなし仮設に認定できないといわれ経済的に厳しかった。
- 熊本市外に住んでいたが震災後すぐ熊本市へ転勤になり住む場所がなく、あっても家賃の値上がりがとてもきつい。

【経済的に困窮】

- 仕事復帰時期が延びた。夫は建設業だが仕事がストップし、収入がゼロになった。
- 地震の際に、もともと少ない貯金を取り崩したこと。
- 保育料の支払いができない。（地震後の欠勤で給料が減少。食費や入浴施設利用などにより金銭圧迫状態）
- 経済的に苦しく、家の修理ができない。保育料や税金が払えるのか心配。
- 仕事がパートへ変更になり、金銭面で大幅な減収となった。
- 子ども達の学校や保育園が休みになり、仕事に行けず、生活に困った。また、職場に迷惑をかけた。
- 家計が回らなくなっている。
- アパートに住んでいて、経済的支援はないため経済的にも危うい。
- 家の建て直しでローンの支払いが増える。

【値段が高くなっている】

- 地震前に予定していた転居ができなくなり、物件を探すものの、民間の賃貸住宅は高額で、来年からの小学校を保育園の校区で考えているのに、市営住宅の募集もなく困っている。
- 親が地震を機に家を建て替えるが、解体も建設費も以前より高騰している。
- 早く新しい物件を探して引っ越しをと考えている。今のところは、前住んでいたところよりも15,000円家賃が高く、買い物をするところが近所にない。
- 古い一軒家の賃貸住宅に前震のときから住んでいるが、外壁や浴槽のタイルにひびが多数あり、修理を依頼しているのになにも対応なし。このままでは不安なため、マイホーム建築も計画しているが建設費が高騰して負担が大きくなりそう。
- 家賃が以前の所に比べて３万ほど高くなった。生活再建の目途が立っていない。
- 以前のマンションから貸家に引っ越したが、家賃が高すぎてまた引っ越すことを検討中。でも引っ越し費用を準備できるか不安。家財保険に入っていたが、対象にならないと言われた。

【家の修理が進まない】

- 家の修理ができていないこと（業者の手が回らず資材の確保も難しいとのこと）。修理ができていないのに台風や大雨があると心配。
- 賃貸住宅に入居しているが、工事の業者がいないので修理が進まない。水漏れなど階下からの苦情がある。
- 業者が決まっても、自宅の再建が進まない。
- 家の修繕を頼んでいるが業者がなかなか来ない。連絡もない。緊急の応急処置止まりで家の中はボロボロのまま生活している。
- 自宅（持家）の内装をどう修理するか。建設会社に修繕着手まで相当時間がかかると言われている。
- 自宅修理が完了していない。修理のため、仕事を休まなければならない。
- 賃貸マンションの修理がストップしている。
- 借家が大規模半壊なのに大家さんが修理してくれず、引っ越すお金もなく不安な毎日である。

【今後の不安】

- みなし仮設に入れたが、その後の生活がまだ決まっていない。来年子どもが小学生になるので焦りもある。
- 住んでいるところの退去期限が迫っているのに目途が立たず常に不安。少し落ち着いて選択肢もたくさんできたらありがたい。

●自宅（実家）をどうするか？建て直すのか。また実家に一緒に住むのか。建て直すためのお金はどうするのかなど。
●地震による家の損壊を完全に修理していないので、再び大きな地震が発生した時どうなるか不安。
●夫の実家が全壊し、建て替えの話が出ているが、予算がなく義両親の生計では困難であり、息子夫婦（私たち）にローンの肩代わりをお願いされることが多々あり、困っている。
●車の修理代・半壊になって住めなくなったために発生した費用。引っ越し先が中々見つからず、以前住んでいた所よりも狭く、荷物を実家に預けるしかない。今は、貯金をはたいて実家をリフォームし、また引っ越す予定。
●引っ越し費用の負担と、必要な時にボランティアに協力してもらえないこと。（半壊、全壊家屋の手伝いには入れないとのことだが、むしろそちらのほうが手伝いが必要なのでどうにかならないか）
●予定より早い家の購入になってしまったこと。
●自分の家族は普通に生活しているが、祖母宅が復旧の目途が立たず、実家の母などが苦労しているので、心配。

6 地震を経験して考えたこと

問10　今回の熊本地震を経験して、どんなことを考えましたか。（自由記述）

日頃からの水や食糧の備蓄はじめ避難袋の準備や避難場所の確認等、十分な備え・心構えができていなかったことを反省する記載が多い。また、災害時には、平時における社会の課題が一層顕著になって現れるため、男女共同参画の視点に立った防災や「生きること」、「家族とのきずな」などについて考える機会になったとする回答も多く寄せられている。主な内容は以下の通り。

【非常時の備え・持ち出すもの】

●非常食やおむつ、着替えを車に常備するようになった。財布にお金をいれておく。
●普段から訓練をする。非常袋の用意が大事。
●社内に最低限の着替えと靴を準備している。
●災害の備えが必要だと思った。今も枕元に避難グッズを置いている。
●ペットボトルの水と非常食を常備するようになった。ラップ、紙コップ、割り箸なども切らさないようにしている。
●食料品、飲料だけでなく衛生用品などを揃えておく必要性を感じたので、玄関先に用具を置いておくようになった。
●地震はきっとまた起こるものと考えて、水、米、ヘルメット、懐中電灯、薬などの備えをするようになった。
●水や粉ミルク、おむつなど、多めに置くようになった。ガソリンが半分になったら、満タンにするようになった。
●水はもちろんだが、ウェットティッシュなどもストックしている。そしていつでも逃げられる様に、スーツケースに必要な物を準備している。
●予備のオムツ、生理用品、着替え、飲食物を車内にも家の中にも分けて備える必要があると考えるようになった。子どもの成長によって内容（服のサイズやオムツ・パンツの有無など）が変わっていくので定期的な見直しが必要。
●本当に危ない時には命を守ることが優先になるので、余裕がない時は何も持たず避難せざるを得ない。
●いつ自然災害に見舞われるのかわからないので、自分の身はとりあえず自分で守るべく、災害時用品をストックするようになった。

【防災の心構え】

●思った以上に、恐怖心で冷静に行動が取れない事が分かった。
●もしもの時の行動をイメージして備えるようになった。
●阪神大震災も経験しているが、自分が子どもの頃と親になってからの地震は全然違う。今までも家具の配置や動線を考えていたが、玄関に常に一泊分の避難道具を準備するようにしている。
●防災に関する意識が高まった。家族分以外にも多めの非常食を準備するようにした。常に「今、地震が来たら」と考え、運転や仕事をしたりしている。
●地震の時、子どもが生後１ヶ月で色々な人たちに声をかけていただき、助けてもらった。この先、困った人がいて小さな子ども連れだったりしたら声をかけて、できる限りの協力をしてあげたいと思った。私はひとり親なので経済的なことは日頃からしっかり考えるようになった。
●日常でも「もしも」の時の事を考えて、水や食料の備蓄などは気をつけている。子どもとは学校や園で防災訓練があった後は、被災した時の行動の確認など、家でも話すようにしている。
●本当に震災はいつ自分の身に起こるか分からないという事を実感した。今は、いつでも大切なものは持って出られるようにまとめている。何かあった時用に、飲み水な

ど備蓄するようになった。
- 災害に対する備えを定期的にするようになった。近所が仲良くなり、より地域に暮らす安心感が増した。
- 今後何があっても逃げられるよう、子ども達を守れるよう避難グッズやアルバム等の整理をするようになった。半年に一回は避難グッズの見直しをしている。
- 災害への備え（食料品、生活必需品の備蓄、持ち出し袋の準備）が大事。当たり前の生活が送れるのは多くの人の支えの上に成り立っていることを痛感。他県での自然災害を他人事と思えなくなった。
- いざという時の備えが全く出来ていなかった為、事前の準備の必要性。熊本地震は２回とも夜で家族が一緒に居る時だったが、日中バラバラの時に起こった時の連絡手段や待ち合わせ場所の確認。
- いつ災害が起こるか分からないと心の中に留めておくこと。急な災害時に、すぐに対応できるように準備しておくことが大事だと思った。
- 家具は突っ張り棒で固定するようになった。余震に慣れてしまい揺れを感じても動じなくなってしまった。家財保険に入った。
- 家具・家電の配置を考える様になった。避難所の場所を知らなかった為確認した。
- いつ地震が起きるか分からないので、家具を高いところにまで置くことをやめて、狭くなったところで生活している。災害で健康を失わない行動を考えるようになった。
- まさか地震があるとは想像していなかったので、これを教訓に地震保険に加入した。

【避難の方法】

- 避難所の確認。子どもだけの時の避難方法。
- 当たり前が当たり前ではないことに気づいた。ライフラインが止まった時、誰が子どもたちを迎えに行くか、集合する場所を決めた。
- 子どもがいるので、地震が起きた場合、家にいたらどんな風に外に出るか、外出していて建物内にいた場合はどこが非常口か、常に確認するようになった。頭の中で、どのように逃げるかのシミュレーションをよくしている。
- 災害時にどのように動くかの判断を、日頃からシミュレーションする大事さ。
- 常に災害があったらと避難場所、避難経路など考えるようになった。鍵や貴重品、携帯電話の置き場所を決めた。
- 共働きなので、子ども達だけで留守番をしている時に地震になったらどうするか、家族で決めごとや準備をすることが大切だと思った。
- 子どもの避難のさせ方を夫と相談。夫が不在のときの避難について話し合った。
- すぐ逃げられるよう服を着て寝ている。（パジャマは着ない）必ず子どもと一緒に寝る。寝る部屋には何も物は置かない。
- 子どもと離れている時、何かあった時のことを考えて子どもに住所、電話番号、親の仕事など、今までよりもしっかり覚えさせた。避難先など避難の仕方も教えた。

【非常時に頼りにすること】

- 職場が頼りになったので、職場での信頼関係、情報共有。
- 生活していく上で大切なもの、そうでないものが分かった。人間らしく健康に生きていく上で大切なもの（歯磨きや消毒スプレーなど）が結構あると思った。
- １年前はとにかく生活を整える、立て直すことに必死だった。今は,その時協力して下さった園の先生方、療育先の先生、地域の方や子育てを通じて知り合ったママ友を思うと日頃からのコミュニケーションが大切だなということを感じる、力仕事以外の生活の再建は、ほぼ女性が担い、協力してくれるのも女性が多い。
- 地震保険の重要さ、地域で助け合える人間関係を築くこと。
- 地域（マンションが一つの自治会なので）の方に良く助けてもらったので、地域の方々とのつながりを大切にするようになった。
- 非常時の頼りになる、ならない等の人がハッキリ分かり、自分は進んで動けるようになりたいと思った。
- 子どもが小さかったので、自分達家族の事で精一杯で周囲から支援されることが多く、とても助かり有難かった。今回の事を教訓に、頂いた支援や励ましを必要としている人に返したいと思っている。
- 誰も助けてはくれない。頼れるのは自分だけだと思った。ひとりで頑張るしかないと思っている。
- 自衛隊がすぐに動いてくれて日本は恵まれていると思った。緊急時の逃げ場の再確認ができた。

【家族や日常のありがたさ】

- 普通に生活できることが幸せだと改めて感じた。
- ニュースで東日本大震災など見ていたが自分の身に起こると思わなかった。何事も他人事と考えてはいけないと思った。本当に大切なのは家族の命だけだと思った。
- 家族の大切さや周りの人との関わり方が変わった。
- 今、生きている事を大切に思えるようになった。
- 日々の生活がいかに便利なものかがよくわかった。当たり前の裏で日々点検などをして支えてくださる人がいると改めて感じた。また災害の備えが大切ということも分かった。
- 命が無事でよかったということをとても感謝した。家族全員でいられることの幸せを感じた。地震前は、関東へ戻ることをいつも考えていたが、少しでも大変な思いを

している熊本の人の力になればと、ここにいることを決めた。

- 自分の住む地域で、あのような地震が起きるとは考えていなかったので、東北の地震などもどこか他人事のように思っていたが、いつ、どこでも、誰にでも起こることだと思った。人の優しさに本当に感謝することが多くあった。特に妊娠中だったこともあり、周りの方の気遣いがとてもありがたかった。
- 何気ない当たり前の生活が、地震直後から、住む家・食料・おむつなど無くなり不安な気持ちだったが、現在はみなし仮設の家があり、子どもたちも保育園に通えて、仕事にも行けているので感謝の気持ちでいっぱいである。
- 一日があるだけでありがたい。当事者以外には忘れ去られつつある。まだまだ不安も大きく、落ち着いて住む、先の見える生活ができていない。
- 日常のありがたさ、家族の大切さに気付けた。地域の方の優しさにも触れることができた。

【子ども・妊娠中】

- 大人は我慢が出来るが、子どもはそれが難しいので非常時といえども、食事・遊ぶスペースや道具は必要だと感じた。そのために日頃から備えが大切だし、大人が冷静でいられるように訓練が必要。
- 夫がいない時に大きな地震が発生した場合、一緒にいる子どもといない子どもの安全確保を考え、どのような行動をしなくてはいけないか、また、荷物の準備等いざという時を考えておく必要があるなと感じた。
- わずか５～10分、子どもを留守番させる事に対しても不安を感じる様になった。
- 乳幼児を抱える家庭は、避難所に行くことを躊躇してしまうことがあると思う。そのような場合の対応策も考えておかないといけないと思った。
- 子どもが、テレビのニュース速報が流れると「地震？」と不安になり駆け寄ってくることがあり、不安が取れていない様子。地震後は、特に保育園の迎えの時間を早めて、仕事の休み等は子どもと一緒にいることにし、気持ちの変化を見守っている。
- 地震の時は妊娠中だったので実家へ避難する事が出来たが、既に生まれていて首も座っていない時だったらと思うとぞっとする。避難所に行ったとして、赤ちゃんが過ごせるような環境なのか不安がある。次に災害が起きても県外に避難すると思う。
- 直後は不安が大きかった。他県での地震があった際に他人事だったと反省した。自分が経験したことで大変さも分かり、家族と過ごす大事さも感じた。子どもたちは車中泊もキャンプ気分で楽しんでくれたのでトラウマにはならずに助かった。
- 子連れ（とくに歩き出したくらいの１歳～２歳児）での避難生活の大変さ。配給、トイレ、お風呂、ランドリー、買い物など、どこに行くにも列に並ぶにも連れていなくてはならず大変だという事。心が折れそうになる時があった。
- いざという時のことを考え、子どもに怪我がないよう皿をプラスチックに変えた。
- 熊本地震の時、ちょうど妊娠が分かった頃だったのですごく不安があったが、病院がすぐあいていたので診察してもらい、不安を取り除くことが出来た。もし、病院が開いていなかったら胎動もない時期だったので不安だったと思う。病院が素早い対応でありがたかった。

【水の確保】

- とにかく水に困った。水をもらいに行くにしても大きな容器などを持っていなかったので、ほんの少しの量しか入らず、水がない不安がずっとあった。ポリタンクを家に備え、食料もある程度買い置きするようにした。
- 断水が続き本当に困ったので、節水を心がけるようになった。
- 地震後、水が使用出来ない日が続いたのでかなり不便だった。水もタンクに汲んできてマンション７Ｆまで階段で運ぶのが大変だった。当たり前のことがどれだけありがたいことかに気付かされた。日々感謝している。
- 水の大切さ。トイレが流れない、水道から水が出ない、お風呂にも入れないなど体験したことで、水がどれだけ貴重な物か分かった。いざという時の備えを１年経ってもう一度見直すべきだと思う。
- 近所は井戸を利用しているので水の復旧は早かったが、水道水の地域は遅れていた。井戸を残すか非常用の水源を設置してほしい。
- 水道の水が出ないのが一番困った。給水所のリアルタイムの情報が欲しかった。自分の身は自分で守らなければならない。
- 備えをしていたが、水のストックを奥の方にいれていたため、家具が倒れ取り出せなかった。持ち出せるところにおく。
- 水道が１日以上ストップしていたので、給水、お風呂、食料品の調達に関する正確な情報がとても必要だと感じた。情報源はインターネットに頼る人が多く、正確性を見極めるのが大変な場合もあった。
- 災害があった時、助け合うためにはそばにいることが一番大事だと気づいた。遠方からは金銭的、または、物的な援助はできるが、実際に動けるのは近くにいる人だけだと実感した。地震でライフライン（特に水道）が止まったことがこの考えに至るきっかけだった。
- 生活する上で、水がどんなに大切かがわかった。下の子

が当時６ヶ月で離乳食をはじめて１ヶ月後ぐらいで食べるものがなく、赤ちゃんせんべいをふやかして、おかゆがわりにしていた。お風呂も入れなかったので、無料で開放している温泉に行ったが、人も多く、下の子が泣き叫んだりと大変だった。

【検証と次への備え】

- 今回の体験だけを語り継ぐのではなく、何が必要だったとか、どんな準備が必要だ等を伝え、今後の備えにしてほしい。今回のことで熊本の方々は、防災意識がとても低いと感じた。
- 助け合うということ。自分も子ども二人を抱えて、人を助けるどころではない状況だが、近所にお年寄りが住まわれている等、気にかけ、声をかけたりするべきだったと思った。励まし合ったり、声を掛け合ったりして助け合わなければいけない。
- 地震後、自宅の片付け中に５年前のハザードマップをみつけて、以前から同じ予測がされていたことに驚いた。
- 実際に被災してみて、本当に大変なのだと分かった。当たり前のことが当たり前でなくなる事、いつもする事が出来ないなど、いかに日頃の生活が幸せなのかを感じた。また、人とのつながりや暖かさをひしひしと感じた。次に被災した所には助けてあげたい。
- 訓練は何度も受けていたが、実際経験すると恐怖を感じ一瞬冷静になれない自分がいた。けれど、今回体験した事で発災したら慌てず行動する事を学び、次回からはしっかり動けると思う。
- 子どもの精神面のフォロー、身の安全な確保について。サポート体制が取れるよう、親戚や友人とのつながりを深める。
- 活断層が100年か1000年に１度動くということを体験したことで、後世に伝えていかなければいけないと思った。
- 自然災害は、ついつい他人事だったが、当事者としてしっかり準備や心の備えをしなければいけないと思った。
- 実際に自分の身に災害が起きてみないと、どれだけ不安で大変なのか想像できていなかった。様々な方からの支援物資で助かり、ありがたかった。いつ、どこでどのような災害が起こるか分からないのでできることを後回しにしないようにしようと思った。
- いざという時にパニックになって、何をすればいいかわからなかった。水害とかではなかったので、片付けなど自分たちすることができた。家が残っただけでも良かったと思う。いつ何がおこるかわからないという怖さを実感した。
- 絶対に災害は来るので、それに備える物的な準備や精神的なことをしっかり学んで、その力を子どもたちにも教えて生き残れるようにしたいと思った。
- 東日本大震災で心を痛めたことに変わりはないが、今回熊本地震を体験して改めて「やはり経験しないと分からない」ということを痛感し、今年の３月11日は、よりしみじみと命の大切さを思い知らされた。心から「忘れてないよ」と被災した方々に言いたい。
- 他県の地震のニュースを見ても、いまひとつピンとこない感じだったが実際に地震を経験して、他人事ではないと思ったし、今後もいつ何時に…という恐怖とずっと付き合っていかなければならない中で、避難用の荷物を常に近くに置いている。子ども達にも地震があった際の避難の仕方などこまめに話すようにしている。
- 市内でも被害の差が大きくて、地震に対しての温度差がかなりあると感じた。自宅の被害が少なくてTVの中でしか大きな被害を見る機会がない人は、どこか他人ごとというか、空き巣泥棒や犯罪が一番悲しい事だった。
- 避難所で物資の配給等で人間のいろいろな所が見えた。こんな時こそ正しく、つらい時こそ笑顔でいなければと思った。
- 箪笥の上に物を載せなくなった。箪笥のそばに寝なくなった。食器を減らした。
- 安全で頑丈な建物へ引っ越した。

【意識の薄れ】

- 最初の数ヶ月は、水や非常食を用意していたが、１年経つと危機感が薄れている。
- １年経ち少しずつ記憶が薄れてきている。備えることは忘れてはいけないと思う。
- 明日生きているかなんてわからないこと。ちゃんと災害が起きた時の準備が必要だと思った。今、忘れかけている時期だと感じるので、今一度、防災袋の中身を確認したい。とにかく子どもを守れるか不安になる。
- 地震直後は家族、日常などの有り難さを痛感でき、ある意味優しくなれたが、一年経ちあの時の感謝の気持ちが日常の忙しさや疲れの中、薄れている様に感じることがあり…反省する。当たり前のことなど、ありもしないと分かっているはずなのだが。
- 天災に対する認識の甘さを感じ、しばらくは先を見て行動・物を大切にする気持ちが強かったが、半年もするとまた意識の薄れがあった。定期的に振り返る事はいざというときにためになると思う。

【考え方が変わった】

- 「弱者を助ける」という、あたりまえのことを考える機会になった。
- 災害に対する考え方、被災者に対する考え方が変わった。
- フルタイムで仕事をしており帰りも遅かったが、地震後

はなるべく早く帰宅し、家族との時間を大切にしている。地震をきっかけに家族との向き合い方を考えられた。
- まだまだ育児は女性が中心なので、とにかくたくさんの分野に女性が入り込んでいけたらと思う。自分もそんなリーダーシップのある女性になりたい。
- 仕事だけではなく、子どもといる時間を意識して作るようになった。今を大事にしようと思うようになった。
- 地震を怖がるより、いつ起きるかわからないので、常に冷静な対応ができるように心構えをするようになった。
- 「そのうちする」のではなく、思い立ったときすぐに行動する。明日何があるかわからないから。
- いつ何が起きるかわからないので、毎日を大切に生きようと努力している。家族の時間を大切にしたり、旅行に行けるときは行くようにしている。
- 実際に困難な状況に直面した人でなければ、お互いに助け合う事ができないと感じた。地震を経験しなかった人にはその時の恐怖は理解されにくい。（県外出張中で地震を経験しなかった夫との間に亀裂が生まれた。）
- 徐々に地震の恐怖は薄れてきたが、津波がくる地域や都会は被害が大きくなると思うので、そういう場所に旅行や仕事で行きたくないと思うようになった。
- ただ地震が怖いと感じていただけだったが、今は揺れを感じても様子を見ながら待って、どこに逃げるとか何をもって逃げるのかを考えられるようになった。
- 人生何が起こるか分からない！ので日々楽しく生活すること。ある程度のお金や食料・水等を身近に準備（ストック）しておくこと。子どもや家族を守るのは「私！！」と自覚した。
- 防災意識が高まった。熊本は地震が来ないと思っていたが、災害は隣合わせであるものだと思うようになった。それだけに日頃の備えが大切。
- いつ自然災害が起こるか分からないと実感した。最近、大雨など全国どこでも起きているので、どこに住んでいても災害は起こるものだと思った。
- 防災に対して特に考えていなかったが、物品の準備等今ではすぐに行動出来るよう改善されたし、辛い時には周囲の方々と協力して助け合う事の大切さを学べた。避難した時の大変さや不便さを考えた上で家を建てた。
- 防災の意識が変わった。以前は他人事のように思っていたが、現在は、もしまた大地震が起きたら、、、と考えるようになり、その時に必要な物は準備している。国や行政が結構頼りにならないことも実感した。「自分たちの身は自分たちで守る」という心構えが、まず第一に必要だと考えるようになった。

【地域・人との繋がり】

- 地域の人との交流で、ピンチの苦しさが変わる。
- 地震は怖かったが、人との助け合いが見られ、心が温かくなる出来事もあった。つながりが薄くなっていると言うがそんなことはない。
- 近所づきあいが深くなった。地域の活動に参加するようになった。
- 自分とおなかの子のことでいっぱいだったあのころ、もっと一人暮らしの友人のことを気にかけてあげるべきだった。
- 地域住民の方とのコミュニケーションは取っておくべきだと思った。年配の方は、小さい子のいる家に、よく目を向けてくれていることも、改めて知った。
- 食品や水の緊急用の備品の備えの大切さを実感したが、月日が経つにつれ少し忘れつつある。近所の方との会話が増え、以前よりも近所づき合いが良くなった。
- 我が家は団地住まいで、同世代の子どもたちや家庭が多く、隣近所の関わりが比較的ある。地震時は情報交換を頻繁にしたり、隣県での一時避難先から物資調達し差し上げたり、頂いたりして本当に助かった。これからもご近所付き合いは大切にしていきたいと思う。
- 近所づきあいの大切さ。顔は見たことあるが、名前も知らない、軽い挨拶する程度だったが、地震以降、話すきっかけができた。協力する事は大切である。
- いつも備えておくこと。近所の方々に声を掛け合うこと。地震以前は何を揃えたらよいか具体的にわからずほとんど何もしていなかったが、備蓄食品、飲料水、生活用品など何か起きても直後には困らないようにと準備ができるようになり、事あるごとに中身の確認をするようになった。顔見知りを作り、日頃からコミュニケーションをとることの大切さを実感するようになった。
- 地域の方とのコミュニケーションが大事。避難所での女性、子ども（授乳スペース等）の生活について、もっと改善が必要である。
- 被害に地域差があり、熊本県内でも北部に住む親戚はほとんど被害がなく、被害に対する意識の違いに格差があり、地震をきっかけに関係性に溝が出来た。

【情報】

- SNS等の情報があまりにもあてにならずびっくりとがっかり。
- SNSは本当に役に立つと思った。断水が長引いた際、井戸水を無料開放している所や、空いている温泉施設、コインランドリー、スーパー、コンビニなどの情報が早く的確に得られた。嘘の情報を流している人はいなかった。
- 直後はいろいろな事が混乱していて、誤った情報に振り回され、それによって不安が増すことがあった。SNSに対しても、あまり良く思っていなかったが、使いようによっては、とても役に立つのだと思う。

- 正確な情報の伝達。若い人はインターネットなどで情報収集は容易だが、ひとり暮らしのお年寄りなどは、なかなか情報を得られないと思う。
- 地域とのつながりは大切。地域の資源（人、場所）を日頃から知り、情報もタイムリーに知ることが必要と感じる。
- 災害が起きた時には、地域コミュニティーが一番大事なこと。老若問わずSNSでの情報が一番役に立った。
- 携帯のアプリで災害情報を見られるようになった。
- 地震直後は、いかに情報を得るのか等考えていたが、1年を経て平常時から情報を共有することはできないかと思う。ある程度でいいので、どのようなサービスをどこで受けられるのか等知っておけば安心できると思う。

【仕事を続けることが困難】

- 仕事を辞めたいと思った。子どもが不安な時そばに居られないのが辛かった。
- 病院勤務のため、仕事を取るか、家族を取るか考えるきっかけになった。地震に限らず常に防災のことを考えるようになった。
- 仕事（公務員）を続けることに自信が無くなった。家族を最大限犠牲にしなくてはならないのが辛かった。サポート体制が必要。
- 休園の間の子どもの預け先がないため、いつか仕事を辞めなければならないかもと考える。
- 震災当時は病院勤務であった。スタッフ患者共に大変な混乱の中に置かれた。その上、他施設、避難所からの受け入れ等、本当に苦しかった。なかなか落ち着かず精神的に疲れ、退職となった。「震災さえなければ…」とマイナスに思ってしまう。
- 災害時は、夫婦共に呼び出されるため、母親の私だけでも休めて、子どもと過ごせる仕事に就きたいと思うようになった。
- 子どもの精神不安から仕事を辞めざるを得なかったので、少し落ち着いた今、またきちんと再スタートしたい気持ちがある。

【ワーク・ライフ・バランス・子育て支援】

- 行政の仕事で忙しくなり、子どもと会う時間もしばらくなく、公務なのでしょうがないと思いつつも、ワーク・ライフ・バランスについて悩んだ。
- 地震が起きても仕事を休めなかった為、今後天災が起きた場合、子を持ちながら働く女性に対して何らかの優遇措置を設けて欲しい。（子どもを預けられるようになるまで休みが取れる等）
- 医療機関に勤めていて全く休めなかった。食料も手に入らず、確保ができなかったし、避難所にあると知っても貰いに行きづらかった。
- 地震後、保育園がしばらく休みになり、仕事は地震の影響でとても忙しかったので、仕事をしながら子育てをする大変さを改めて実感した。今後も災害が来たら、仕事をやっていけるのかが不安。
- 夫は1回目の地震の時まだ勤務中で、職場の片付けの為、23時過ぎにしか帰って来ず、2回目の地震以降は避難所に泊まり込みの運営に出かけ、子どもを守る為に頼りになるのは自分自身しかいないと考えた。地震以降、夫の勤務状況が変わってないので、今後何らかの災害の際も自分だけで対応しなければならないというプレッシャーがある。
- 現在の仕事とは別の資格を取り、活躍していこうと夢見ていたが、諦めて、今の仕事を着実にしていこうと現実的になった。
- 育休復帰した直後の地震で、子どもは1歳半くらいだったが、公務員なので休むとは言えず、日中はずっと家族に子どもを見てもらっていた。その家族も体調を崩したりしたので、小さい子どもがいる女性は、たとえ公務員であっても家庭環境を優先するような雰囲気づくりを望む。
- 仕事をしているお母さんたちは、子どもが一番だけど保育園が休園になり、でも仕事にも行かないといけない、どうしたいいのか？という不安に陥ったと思う。（私自身がそうだった）そういった時の支援（子どもを一時的でもいいので預けられる場所も含む）があったほうがいいし、もしあったとしても知らない人が多い。働いているお母さん達へのサポートがあればよかった。
- このような非常事態では、小さな子どもを持ちながら母親が働いている、ということが「負」にしか働かないということが身に染みてわかった。男性は休めない、会社も大変、私も実母がいなければ子どもは預けられず仕事もできなかった。“安心して働ける”という理想とはかけ離れている。このまま母親が働けるのか？実家が近くになかったとしたら果たしてどうしたか？考えるだけでゾッとする。
- ワーク・ライフ・バランス（今は子ども中心）をきちんととる。いつ何があるかわからないので、今しかできない子育てに後悔しないよう、仕事をセーブする勇気を持つ。もともと東日本大震災後、備蓄や災害時どうするかのシミュレーションを何となくしていたが、形だけでなく実践しやすい工夫をするようになった。
- 地震後は家族優先であるべき（食料等の調達や、大きな余震に備えて家族と一緒にいる）だと個人的に考えていた。またそれが当然周囲からも許されるべきだと思うが、仕事を優先する人が多く、それを他人に強要する人が多いことに違和感があった。水も食料もなく遠方まで買い出しに行ったり、家族と居たいのに出勤しないことを責める人が意外に多くてがっかりした。自治体から各企業

に家庭優先を呼び掛けてもいいのでは？と感じた。

- 災害などにより子どもを保育園に預けられないとき、なぜ男は仕事に行って、女が（仕事を休んで）子どもの世話をするのかが分からない。男は仕事、女は家庭という昔の考えがいまだに消えてないなと改めて思った。

【経済的支援・税金のこと】

- 自分達で衣食住を守り、維持できるように品物、お金が必要だと思う。又、サポートしてくれる人が必要である。行政や会社がもう少し働く女性の身になって考えてほしい。正規職員で働かないと生活が出来なくて心身共にきつい。
- 地震直後は、家族の健康や今後の生活をどうするかなど、引っ越しが大変で考えられなかったが、1年経った今は将来について色々考えられるようになった。また、税金や議会のことなど、私たちが納めているお金がどのように使われているのか、より知りたいと思うようになった。
- 地震に対する恐怖が数ヶ月あり、自分が思っている以上の精神的ダメージ。要介護の親、小さな子どもがいるため「自分がしっかりしなくては」と気力で乗り切ったように思う。慌てず、冷静な判断力が必要。休職中だったので避難できてよかったが、仕事を持つ母親は大変。
- 地震後、炊き出しや物資の支援等をしているところもあったが、店やスーパーも比較的空いていて、一番必要なのは現金だった。小学校が休校となり、パートにも出られなくなったため、経済的に問題。

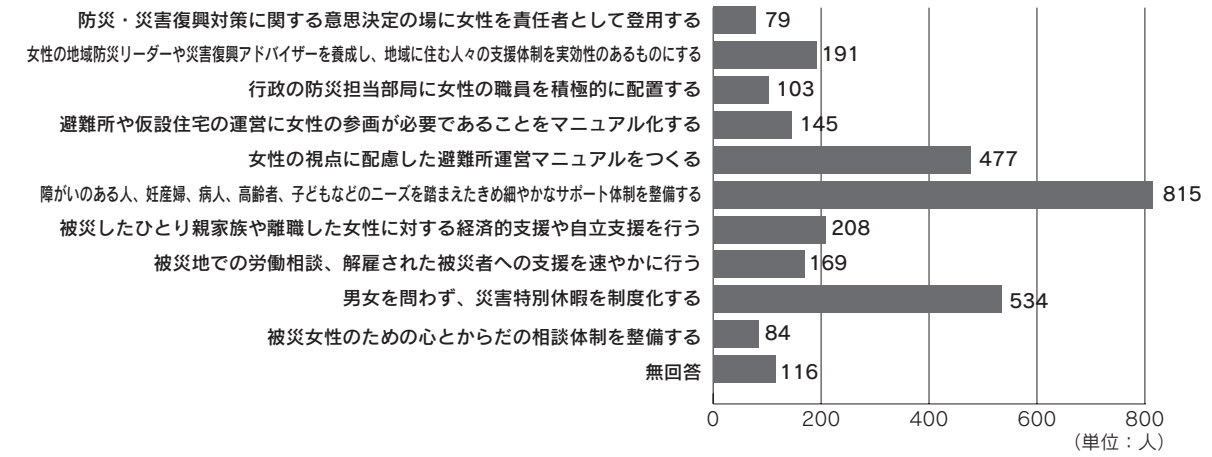
【その他】

- ちょっとしたことでイライラして子どもにあたるようになった。同居のむずかしさ、一部損壊と半壊の支援の差が大きいことに悩まされた。
- 生活の場が確保されているだけで精神的にぶれずに済む。地震大国なのに自分には起こるわけないと考えている人があまりに多くびっくりした。
- 原子力発電は本当にいらないと思った。
- 経験の受け止め方には個人差が大きい。
- 職場が避難所となったので、そこでのボランティアを通して考えることのほうが多かった。行政は、避難所対応の在り方をもっと考えるべきだと感じている。難しいことではあるが、避難者の自治も必要であると感じた。
- 古い民家で人の住んでいない所などは、周囲の人に危ないからという考えは薄く、母屋だけ修理して済ませている所がたくさんある。住んでおられる方が高齢で、そこまでは…という考えとは思うが、1年後でも改善されず、もどかしい気持ちが強い。
- 地震後は「がんばれ熊本」「がんばろう」という言葉が多く見られ（看板やCM)、今でも見られるところはあるが、多くの人が既に頑張っている状況の中、励ましの言葉を人々が必要としているのか疑問に思った。頑張っているのは分かっているから、少しは息抜きも大事等、張りつめている気持ちを少しほぐすものがあってもよいのではと思った。正直、地震後は、そういった看板を見るのもイヤだった。

7 防災・復興のために必要なこと

問11　防災・復興体制の確立に男女共同参画の視点を反映させるためには、どのような内容を盛り込むべきだと思いますか。（3つまで）

図 20



防災・復興体制の確立に男女共同参画の視点を反映させるため、盛り込むべき内容について必要度の高いと思うものの中から上位３つを選んでもらった。

回答者1095人中、最も多かった回答は815人（74.4％）の人があげた「障がいのある人、妊産婦、病人、高齢者、子どもなどのニーズを踏まえたきめ細やかなサポート体制を整備する」、次いで「男女を問わず、災害特別休暇を制度化する」534人（48.8%）、「女性の視点に配慮した避難所運営マニュアルをつくる」477人（43.6%）、が挙げられた。ほとんどの人が、弱い立場の人をサポートすることを「優先順位の高い」こととして認識していることが分かる。

そのほか、多い順に「被災したひとり親家族や離職した女性に対する経済的支援や自立支援を行う」の208人（19.0％）、次いで「女性の地域防災リーダーや災害復興アドバイザーを養成し、地域に住む人々の支援体制を実効性のあるものにする」191人（17.4％）、被災地での労働相談、解雇された被災者への支援を速やかに行う169人（15.4％）、「避難所や仮設住宅の運営に女性の参画が必要であることをマニュアル化する」145人（13.2％）であった。**（図20）**

8　復興に向けての意見や希望

問12　特に育児中の女性として、復興に向けての取り組みに関する意見やご希望などがありましたら、自由にお書きください。

問12では、問11以外に、特に育児中の女性として、復興に向けての取り組みに関する意見や希望を自由記載形式で尋ねた。

回答では、地域防災における女性リーダーや行政の防災担当部局に女性を登用することに関して、女性は、自分の家庭（特に子ども）を優先させるので、男性の方が良いという意見や、災害時に子どもを預けてまで仕事に向かわなければならない状況を疑問視する声も寄せられた。

災害時であっても出勤することが求められる仕事が継続できるように保育所の整備・充実を希望する意見も多かった。一方、緊急時に保育園が休園した際、男性が仕事を優先し、家事育児のため母親が休むという性別役割分業になった現状を踏まえ、この意識こそが問題と言う指摘があったほか、同様の調査を、育児中の男性にも行ってほしいとの要望も寄せられた。多様な立場の人を念頭に置いた体制の整備と共に、男女を問わない災害特別休暇を制度化することを望む声が多かった。

＜自由記載の主な内容＞

【乳児に必要な支援】

- 液体ミルクを災害時に支援物資として配っていただけると助かる。
- おむつや離乳食、子どものおやつや食料の早期配布。
- SNSで友人からオムツや水の情報をもらったが、それがなかったら本当に子どもの物を集めるのが大変だったと思う。子どもの物資がある場所などをTVなどで放送したり、みんなが平等に過ごせるようになってほしいと思った。
- 復興に向けて大切なのは日々の生活が安心して送れること。私は、地震時は妊娠中だったが、出産直後だったらとても大変だったと思う。赤ちゃんのミルクとオムツを心配なく確保できることが重要課題だと思う。災害後３ヶ月までは母子手帳持参で保育園や幼稚園で必ず調達できる等の取り組みがあるだけでも安心感につながる。
- 断水が長く、哺乳瓶の消毒、ミルク作成時の水の確保に

一番苦労した。小さな子どもをつれて水の配給には並ぶ事はできないので、水の配給については今後色々検討してほしい。

- 通っていた保育園から連絡メールが来て、水やオムツなどをもらえた。預かってもらうことは無理でも、一時的に園庭を使わせてもらったり、園に行くことで子どもの安心感が得られると思う。
- 乳幼児のおむつやミルク、アレルギーがある子どもへの食事。各避難所で必要な情報、物資が手に入るよう情報の窓口として相談室が各避難所に欲しい。
- 保育園や学校・公民館等を中心に、おむつやミルク等を配給してくれる様な体制を整えてほしい。配布場所がバラバラになっても分からない。
- 哺乳瓶など使い捨て出来るものを身近に販売してほしい。震災時には洗ったり消毒出来ないから。

【女性・妊産婦・乳児を持つ母親への配慮】

- 子どもを抱えた女性は、災害弱者の一人だと思う。災害時に、育児中の女性に必要な情報（おむつや離乳食、ミルクやお湯の配布、子どもとお母さんの心理的サポートの相談など）をHPなどにまとめて表示できるようにして、そのアクセス先を平時から情報提供すること（例えば母子手帳への記載、子どもが利用する施設にパンフレットを置くなど）も工夫してほしい。非災害時（平時）からの支援が必要だと思う。
- 女性は生理が周期的にあるが、避難場所などでは男性があまり女性の身体の知識がなく、生理用品などそんなに必要ないだろうという考えの方が多く、多くの女性はなかなか言えなかったと聞く。生理中の女性が特にきつかったと思うので、そのような教育もしてほしい。
- 災害後でも母親は子ども優先で生活していく必要があり、本当に大変だった。避難所で子どもがいることで嫌な思いをしたため、子どもはもちろん母親（女性）に配慮した取り組みが必要だと思う。母親（女性）への身体的、精神的安定が復興にもつながると思う。
- 支給品など、子どもや妊婦を優先して欲しい。未来ある人よりも未来ない人が優遇されるのは納得いかない。
- お風呂になかなか入れず、不衛生になってしまうのは仕方がないが、感染のため妊婦がお腹の赤ちゃんを亡くしたニュースを見て、自分と同じ位の周期だったのでいたたまれなく感じた。生理用ナプキンも必要だが清潔を保てるよう「おりものシート」もあればと思った。
- 地震の後、妊娠している人のケアをもっとしてほしかった。妊婦なのに水をもらうのに３時間も並ぶのはとてもきつかった。
- 地震後、無理をしたのか切迫早産になった。育児中の方と同じくらい妊婦にも支援をしてほしい。
- ミルクがなくなったため、避難所に行ったがそこにはなく、違う避難所に行ったりした。隣の避難所に、何があるかは把握されていなかった。私は、完全ミルクで子どもを育てていたため、本当に困った。子どもを育てたことがある女性でも、母乳が当たり前と考えている人が多くいる現実を知った。育児中とは限らないが、様々なニーズに答えられるよう、また、自分の固定観念にとらわれずにその人、今の状態を受け入れてもらいたいと思った。市職員だけではなく、民生委員なども教育を受けてもらいたいと思った。
- また、いつどんな災害が起こるかわからないので、いつ何時でも、子どもや女性も安心して過ごせるような環境づくりが大切だと思う。
- 今回、地震を通して一番思ったのは、子連れの親子に対して厳しいということ。乳幼児を抱えた親に対して、30分で風呂に入れというのは、とても難しいこと。もっと子育て世帯に優しい復興プランが必要と思う。
- 出産直後だったらと思うと怖い。頻繁な授乳、出血、赤ちゃんの体を洗えない、おむつの処理など学校の体育館では行えない。電気、水がなくても安全が確保された個室（ホテルとか）が（後払いで）借りられるといい。

【子どもの預け先・保育士支援】

- 災害時の子どもの預かり場所の確保と保育士の確保。
- 災害時、出勤しなければならない職業のため、緊急保育所の開設等を希望している。
- 育児中の女性も子どもを預けて仕事できる環境作りが必要だと思う。
- 北九州に避難した際、北九州の保育園が無料で引き受けてくれた。熊本以外で自然災害があった際、避難してきた子どもを幼稚園や小学校で一時的に受け入れる体制を整えていくと良い。
- 地震時に保育園が一時的に預かりができなくなり、出勤できない女子スタッフが多く、独身者や男性などのスタッフに出勤負担が増えた。職場に一時的に託児所のようなものをつくり（実際に子守をするのはスタッフ）出勤者を増やす工夫をしていた。災害時の会社などへの保育士の派遣、臨時託児所などあれば良かったと思う。
- 保育園の復旧、受入れ体制を整える。先生方も被災されているので、先生方のサポートが重要だと思う。
- 託児所がないと片付けもできない。再建までのスピードを上げるには、早急に非常時の託児所や保育園の一時預かりを増やすなどして欲しい。保育士の県外からの応援等。
- 学校、保育園等が閉校時、子どもを預ける場所がなく仕事に行けない。どうにかしてほしい。保育園料や学童保育料は３ヶ月は減額処置してほしい。（仕事に行けないと給料も出ないので支払いできない）

●学校や保育園の休校（休園）は本当に困る。被災者であっても看護師だから仕事は休めない。対策を考えてほしい。
●震災後仕事を休めない状況で、避難所に子どもだけ置いて出勤している人がいて、そのことを避難所で非難されていた。そんな事がないよう子どもを預けられる場があれば良いと思う。人がいないと仕事は回らないのだし、仕事をしなければ生活も維持できない。
●医療職に従事している為、災害時に休暇を取ることができない。小学校や保育園が休みになった場合、職場で子どもを預かるような体制（システム）を作って欲しい。（努力義務化するなど）台風の時なども困っている。
●地震直後にも仕事に出なければならない人達のために、子どもを預けられるような体制がすぐ作れるように対策を立ててほしい。
●園の建物は大丈夫だったが、ガスが来ないだけでなかなか開けてくれなかった。ほかの保育園は弁当持参で早く開けてくれるところもあったようだ。市立の保育園も、もっと働く母のことを考えて早く開けてほしかった。

【子育て環境・子どもの過ごす場所】

●避難所にもキッズルームを設けてほしい。
●１回目の地震直後でも、避難所内にすぐ授乳室が整備されていたのでありがたく思った。色々な立場の人を想定して運営することは、大変ではあるが必要だと思う。
●休園・休校が長引き、普段の生活ができなかったことでストレスは相当なものだった。日常を取り戻すためにも早く再開できる体制を作ってほしい。
●学校が避難所になり、教師が運営にあたっていた。先生の仕事ではない。学校が機能しないと親は仕事にいけない。
●子どもがいて働いていると家事、子育て、仕事をしなければならず精神的負担はかなりある。災害時は子どもを預けるところもなく、仕事にも行けなかったので、預けられる場所や子どもがいる家族だけの避難所等も必要だと思った。
●子どもが多い家庭など、母親ひとりだけで一日中子どもと一緒に過ごすことは長期間だとストレスにつながる。家族でいられることが一番大事なこと。
●「育児中の女性」に関する調査という、育児は女性が主にやっているという視点が残念。復興に向けて、家族という視点で取り組んでもらいたい。
●妊産婦や小さい子どもがいる女性は避難所での生活は難しいと思うので、ホームステイのように、その家族を預かってくれる家族を前もって募集するなど対応してほしい。
●子どもに関する施設、保育園、幼稚園、公園、図書館等の復興や防災対策にもう少し力を入れてほしい。観光施設などの復興も大切だが、まずは地域に暮らしている私たちが楽しく過ごせないと意味がないと思う。
●保育園や学校の耐震対策をしてほしい。
●熊本は親子で遊べるスポットが少ない。育児中は特に不安になる事が多いので、同じ経験をしたママ達とゆっくりできる所ができると嬉しい。
●子どもたちが安心して遊べる場所を増やしてほしい。まだ地震で壊れている遊び場など早く修理・改修されることを切望する。
●子どもたちを一時遊ばせられるような場所や、保育士等の提供があればストレス軽減につながったのではないか。日中夜、缶詰め状態で幅広い年齢の人が一緒に過ごすことが逆にストレスになると思う。子どもに少しでもお菓子やジュースがあればいい。
●これからの日本を支える未来ある子どもたちを第一に考えた取り組みに力を入れてほしい。
●子どもが明るいと未来は明るいと思う。社会全体で育ててくださる気運をもっと高めていきたい。
●子どもが自然と触れ合える場所は貴重なので、早く阿蘇を復興してほしい。

【働く女性支援】

●もっと育児中の女性に配慮のある雇用をと願う。企業の側に理解力がある方が少ないと、とても働きづらく思う。
●育児中の公務員の女性は、発災後、育児することが全くできない。サポート体制無しで公務に従事する他無い。
●復興や災害支援する女性職員の子どもの世話をする制度がないと問11のように女性は活躍できない。
●乳幼児を育てる女性は、本当に社会的弱者なのだなと思い知らされた。特に就労しているものは「退職」に追い込まれて、女性一人で泣き寝入りとなった。
●保育園も休園となるため、企業等に対して職場に子どもを連れてくることへの柔軟な対応を促す。

【育児をひとりで抱える】

●小さい子どもがいてひとり親で育児をしている人への精神的なサポートをしてほしい。
●男性は仕事にいき、女性は仕事をしつつ、育児もほぼ一人で負担するスタイルがこの地震で強くなったと思う。男性も女性も共に育児をしないと、女性は子どもに対して優しくできなくなると思う。
●幼児を持つシングルマザーの子どもを一緒に見てくれる人がいない。仕事もどうなるかわからない。何を、誰に、どう頼ったらいいか分からないと途方に暮れている姿を

目の当たりにして心が痛んだ。そういう方のサポートがスムーズにいくようにしてほしい。

- 今はひとり親の男性も多い。それに育児に協力的な男性もいる。すべてにおいて女性は必要と思うが、男性も必要。でもまた同じ地震があったら女性だけのスペースがあるといいかも。隠れておっぱいをやらなくていいし、おむつ替えも気を使わなくていいから。

【仕事より家庭を、災害特別休暇】

- 働く女性でも家族を第一に考えられるような制度があると嬉しい。問11に示された「災害特別休暇」制度が欲しい。
- 「災害特別休暇」は絶対制度化すべき。ライフラインに関わる仕事は仕方がないが、仕事よりも家族優先の世の中になってほしい。
- また大きな地震が起きたとき、（医療職のため）仕事に行かなくてはならない。しかし子どもがまだ0歳児で、父親（夫）がやむなく仕事を休むが、この時の休暇は現在欠勤となるので、「特別休暇制度」が欲しい。
- 大きな災害があった場合、子どもを預ける先（学校、幼稚園、保育園）は必ず休園・休校になるため、親は仕事に行けなくなる。預ける先（実家など）があれば良いが、ない場合、仕事を休むのは必ず女性になる。家庭（子ども）の事情で仕事を休むということを職場、会社、社会全体が理解を示してほしい。
- 災害時の子育て世帯の支援への取り組みが進んでほしい。
- 災害時には子どもや家庭を優先してあげるような社会であってほしいと思う。
- 両親とも仕事があるのに、子どもの預け先がないと休むのは母親という雰囲気があり、そこは夫婦間の理解も必要だが、男性にも子どもが小さい（介護が必要な親がいる）等で、休みを取ったらどうか、と言える職場にできればと思う。女性には女性の役割もあるが、仕事も含めて男女ともに分担していくべきだと思う。
- 地震時、私は妊娠中で、地震後の業務は身体を動かす職場の片づけが主だったため、母体の不安もあり、上司に裁量頂き一週間ほど休んだ。その後、「特別休暇」が認められた。とても理解のある職場で大変助かった。小さい子どもがいる方や妊婦に対して自治体等が率先してサポートできる体制を整えてほしい。
- 子連れで安心できる避難場所が必要。余震が続く中、子どもを預けて働きに行くのは不安だった。災害休暇や手当があれば子どものそばに居れた。

【対象別の避難所】

- 子ども連れのみの避難所があればいいと思う。（高齢者から「うるさい！黙れ！」と言われた友人がいたので避難する方も気を遣う）
- 児童館など、子どもが遊べる環境のある所が避難所になればよいと思う。
- 子ども連れが安心して避難できる場所をつくって頂き、日頃から宣伝して欲しい。
- 避難所は小さい子ども連れではなかなか入りづらく、今回は家族だけで行動した。お年寄りなどもおられる中、騒いだりする子どもは連れて行きづらく、対象者を絞った避難所もあっていいと思う。子育て世代は移動手段も持っていることが多いので、地域内でなくても大丈夫ではないかと思う。
- 小学生以下の子どもがいる人限定等、対象者を絞った条件付きの避難所があったら良い。
- 小さい子どもを連れての集団生活にはためらいがある。運営側、ボランティア側がサポートしてくれても、市民の理解が伴うかは別問題。一人一人の意識付けが必要。
- 子どものことで周囲に気を使う必要がない地域づくりが大事。子どもと一緒に行う地域活動は重要で、そういうものが避難所で気を使わなくていい地域になる。
- 子どもたちにおいては、避難所よりも保育所など日常から利用している場所のほうがいいのではないか。子ども、障害者、老人等年齢別の避難所を設けるとスムーズにサポートできると思う。
- 安心して過ごせる避難所が近くに欲しい。

【医療・衛生環境】

- 市民病院の産科が閉鎖しており、合併症のある入院管理の必要な妊婦さんは県外での管理になるため、相当なストレスだと思う。
- 子どもの薬が切れて病院に行くのに3倍以上の時間がかかり、余震の恐怖を抱えながらの移動は大変だった。病院間で情報共有ができ避難しているところから近い病院で処方してもらえるようになれば病気を抱えている人にとっては助かる。要介護者を受け入れる体制を整備してほしい。今回は通院している病院へ相談し、何とか無理行って受け入れられたが定員を超えている状態だった。
- 地震があった時は妊娠8ヶ月目で検診を受けられるか出産できるのかとても不安だった。行き慣れていない病院に行くのは抵抗がある。病院間のネットワークが日頃からできていて「もしもの時は…」という体制が整っていると安心できる。
- 特にトイレの不潔さが気になった。仮設トイレは和式で子どもが出来なかった。（慣れてないので）
- ライフラインがストップする中ではあるが、衛生管理はしっかりしてほしい。

【災害時・防災の女性リーダー】

- 女性のリーダーやアドバイザーは難しいと思う。その人の家族や子どもを優先すべきだと思う。そう考えると災害時は、リーダーが複数人いるほうがいいと思う。マニュアルを作ったりするときは、何人かリーダーがいるほうがいいし、女性の意見もあったほうがいいと思う。あらゆる方向から考えられる。
- 震災中に女性がリーダーになったり、行政の防災担当部局の配置は難しいと思う。育児中はなおさら。
- 大切なのは責任者やリーダーの性別ではなく、実行する内容ではないか。女性を起用しないと改善できないのであれば起用を増やすべきだが、最適な人材であれば男女問わず責任者になって頂ければいいと思う。
- 地震直後は、育児中の女性職員は家庭があるため仕事配置しても、緊急時すぐにかけつけられるか問題があると思う。
- 女性は基本的に家族を優先する傾向があるし、被災者としても頑張っている女性はありがたいが多少心配になる。防災には程よく参加してほしい。復興に関しては女性同士でわかる事もあると思うので、積極的に参加して欲しい。
- 女性は子育てしていくために細かいところに気が付く本能があると思うので、防災・災害時に多く必要だと思う。
- 母親は有事の際、家庭・子どもを優先することになるから問11の「行政の担当部局に女性の職員を積極的に配置する」には反対。
- 復興には各所で女性のリーダーもおき、しっかり細かいサポートも行き渡るようにして頂きたい。あらゆる人に平等にサポートがあるべきだと思う。

【精神的サポート】

- 被災した人の心のケアを充実してほしい。きめ細やかで継続した支援が必要だと思う。
- 気持ちをサポートしてくれる所がどこにあるのか情報発信がされるとよいと思う。
- 被災直後は「子どもを守らないと」という思いで気が張っていても、時間がたつと、少しずつ自分にも目が向き始め、身体的・精神的な不調が出てくるのではないかと思う。長期的なケアが必要だと思う。
- 精神面で大変な人のために気軽に相談できる場所を設ける。このようなアンケートなどで話を聞いてくれると気分が軽くなる。
- 守らなければいけないというプレッシャーと不安の中で誰にも相談できない方のケア、相談窓口、同じ方同士がふれあい、話し合う場所の提供など、楽しく育児のできる体制、環境づくりをしてほしい。
- 各避難所だけでなく自宅等でも気軽に相談できる場所が欲しい。なかなか外出できない人もいる。通園通学していない子どもの心のケアにカウンセラーに来てほしい。
- 地震をきっかけに心に傷やPTSDを抱えた子どもたちへのフォローをしてほしい。経済的な問題に直面しているご家庭の子どもが、十分な教育を受けられるための支援をしてほしい。
- 地震後のストレスで、突発性難聴になった。自分ではなんともないと思っていたが精神的に結構きつかったのだろう。子どももいまだに怖がっている。精神的なケアや講習などをしてもらえると助かる。
- 育児中の女性より、中年女性、特に専業主婦の方への心のケアが必要と感じた。

【経済的支援】

- 経済的な支援を必要としている人への就労斡旋や託児案内の必要性。
- 片親なので、家が被災してなくても、もう少し経済的支援をしてほしい。
- 女性や男性を問わず、困窮している家庭に支援が必要だと思う。また仕事が早急に再開したため、子どものケアをきちんと出来なかったので、家庭をまず優先に出来る社会になってほしいと思う。
- 震災後、休園、休校となり、仕事を休まなければならない時の支援や市や区からの働きかけがあってもよかったのかなと思う。また、保育料も休んでいて収入が減った中、翌月まとめての徴収は経済的に厳しかった為、４月分だけでも分割にしてほしかった。

【避難所の運営】

- 必ず実行される避難所運営マニュアルを作るべき。必要な物資が届かないのは非常に困った。運送会社との連携や、物資が１年位経過後に余ったという実情も聞くので、各避難所の把握と共に、余剰が出ないよう、不足が出ないよう、情報整備をしてほしい。
- 避難所に物資が届くまで３日位かかったので、その間必要な物をストックしておかなければならないと思った。
- 避難所運営のリーダーが良くわからなかったので、誰に相談したらよいか困った。また、リーダーは（複数の人で）固定した方が良いと思った。引継ぎだけでは限界があった。
- 小学校の館内放送はあっていたが、公民館側にいたので情報が聞き取りにくく「掲示板」を作ってほしかった。

【行政への提案】

- 各自治体でパンフレットなどを作成し、顔が見え、分かりやすくしておくことで万が一の時に安心できる。

●色々なことを制度化するだけではなく、浸透させることが重要。例えば、「災害特別休暇」を制度化しても、会社全体がそれと認める、受け入れる体制が出来ていないとただの制度にしか過ぎない。
●地震を経験し、育児をしながら就労している女性の大変さを実感した。罹災証明書や諸手続きをすることは仕事をしながら小さい子どももいる状況では大変だった。インターネットなどを通して在宅でも手続きなどができればいいと思う。
●非常事態において、行政はもう少しスピーディーに現状を把握し、実効性のある動きをしてほしい。
●行政の対応に何度も泣かされ、悔しく、やるせない思いをした。女性、高齢者、障害者にもしっかりサポートしてほしい。マニュアル化も必要だがしっかり学び、相手の気持ちや立場を踏まえ対応するなどのサポートがないと、傷ついている人をさらに追い込むことになる。
●支援制度がわかりにくく、手続きが面倒。全壊ならこの制度が使える等、まとめて申請できるようにしてほしい。自分で調べてやっと保育料の減免の申請手続きに行ったら「できない」といわれたのに、後で申請可能と封書が届き、市に対し不信感が残った。
●教師は教育が専門である。市の職員は行政が専門なので災害時のマニュアルを作って研修訓練しておくべきだし、積極的に動くべき。「避難所には先生がいるから」はだめだと思う。若く体力のある男性職員が残業手当ももらっているのに何もしない。トイレ掃除もせず、「先生お願いします」状態で驚いた。何のために手当をもらっているのか。他県からの応援職員がよく働いておられた。
●「熊本地震による離職」という理由があるのに、市役所に尋ねたところ「2ヶ月以内に仕事につかなければ、保育園は退園」と言われた。子どもの世話やメンタルケアが必要な時に就活しなければならなくなり、何のための行政なのだろうと悲しくなった。

【地域での防災と復興】

●子ども世代に経験を伝えていくこと（教育や防災訓練など）を続けていく。人々や地域とのつながりを積極的に作る。今回の地震のあと、地域の自治会、子供会に参加するようになった。
●地域での防災訓練が必要だと思う。足の悪い方や、高齢者、妊婦や子どもなどが、すぐ避難できない場合もあり、また避難所までの足がない人のために、住宅街を巡回して皆を乗せてくれる車があればいいと思う。
●復興に対するイベントは子どもの心の傷を埋めてくれ、笑顔が見られ、母としても子どもの笑顔が嬉しく、支えになるので、子ども向けのイベントを増やしていただきたい。（益城や西原等の大きな被災地だけでなく、住む場所を限らず）
●子どもたちが喜ぶイベント（夏祭り、ウォータースライダー、花火）があると、楽しい気持ち、思い出をいっぱい経験させることができ良いと思う。熊本市内の保育園にも有名人に来てほしい。
●解体工事が増えて、通学路でも危険だと感じることがある。釘などが落ちているので、工事現場の人には丁寧に、安全を配慮した作業を心がけてほしい。

【制度やサポートの提案・弱者支援】

●育児中の女性の緊急ラインがあると良い。
●発達障害のあるお子さんに対しての配慮。サポート体制、協力があればいいと思う。
●外国人のニーズも踏まえた体制の整備。
●休園休校中、子ども達がすることがない。ボランティアをさせる仕組みを作ると良い。
●自然災害が頻発しているので、被災した人たちが忘れないよう、「災害想起カレンダー」等を作ったら良いと思う。
●ベテランでもわからないことがあると思うので、若い人たちも交え、その人たちの意見を受け入れやすい、意志を伝えやすい環境を作り出すこと。
●民生委員はお年寄りばかりで、大地震の時に素早く動くことは難しいと思う。もっと若い女性（20～40代、子育て中で子どもの学校や保育園等に面識、コネのある方）も民生委員に加わってほしいと思った。そういう仕組みを作るのも一つ。
●育児中の女性や乳児、お年寄りなど弱者に対する支援を手厚く考えてほしい。
●地震後はパニックになりどこへ逃げればよいのかわからず町内を行ったり来たりしていた。町内放送で、避難できる大きな駐車場など周知してほしい。

9 調査を終えて

平成28年４月に起きた熊本地震は、震度７が２回、震度６の余震が何度も発生する近年に例を見ない災害となった。過去に起きた阪神・淡路大震災や新潟県中越沖地震、東日本大震災における救援と復興の過程では、男女共同参画の視点が十分に生かされておらず、女性に必要な支援が行き届かなかったという報告があった。

熊本地震発生後すぐに内閣府男女共同参画局から「男女共同参画の視点での避難所運営」に取り組む旨の指示が出されたが、熊本では、避難の形態が避難所にとどまらず、在宅やテント泊避難および車中泊避難等多様だったこともあり、全体にその視点を行き渡らせるには一定の時間を要したと思われる。

はあもにいでは以上のことを踏まえ、男女共同参画の視点から独自に実施した「避難所キャラバン」の中で特に課題とした子育て世代の避難状況に着目し、“未就学の子どもを育てている女性”を対象にした調査を実施した。

アンケートの回答から見えてきたのは、まず地震後に直面した困難として「ライフラインがストップした」（847名72.5%）に次いで多い回答が「子どもや乳幼児を連れての避難が大変だった」（685名58.6%）など、幼い子どもへの理解がない避難所での生活や、保育園等の預け先が休園する中仕事を休めない女性が苦労した状況であった。また、避難所における生活で不安・不便に感じたことでは、高齢者優先で「妊婦」および「乳幼児」に対する配慮や支援物資・設備の少なさが多く挙げられた。妊娠している女性が「衛生面・精神面で不安・ストレスを感じ流産につながった」との回答があったほか、新生児が震災関連死と認定された報道もあり、幼い子どもがいる家族の居場所（スペース）確保と合わせ、妊婦、乳幼児においては生死にかかわるリスクが高まることへの対応が今後の課題として挙げられる。

同様に、指定避難所では必要としていたすべての人員を収容しきれず、避難したくてもできない人や支援が届きにくい状況を作っていたことも分かった。多様な場所で避難生活を余儀なくされている被災者に対して、緊急時の情報の発信方法（インターネットやSNS等）の明確化と周知が必要である。また、はあもにいが行った「性被害やDV防止啓発のための情報発信」についても、「知らなかった」という人がほとんどであった。災害時に予想されるリスクに関する啓発は、平常時のあらゆる機会を使って周知徹底しておかなければならないことがわかった。また男女共同参画センターが災害時に果たす役割についても再度行政と協議した上で、関係機関や市民に対して明示しておく必要がある。

男女間の格差や性別役割分業意識は、平時より災害時に、より強く露呈されてくるということを裏付けるように、女性は被災によって家庭でのケア労働(注)負担がますます重くなっていることが明らかになった。他方「死ぬかもという恐怖の直後だったため、子どもと離れて仕事に行く不安が強かった」という回答に代表されるように、大災害時「仕事をとるか、家族をとるかを考えるきっかけになった」「家族との時間を大切にするようになった」等、仕事に対する考え方が変化したという記述も多数あった。

また、自らも被災しながら、業務遂行が優先される公務員や医療・福祉業務従事者、ライフラインの復旧にかかわると思われる人たちの回答の中には、「家族を最大限犠牲にしなくてはならないのが辛かった。公務員を続けることに自信がなくなった」「子どもが不安で離れたがらないのに無理に置いていくのが辛かった」という悲鳴にも近い声が挙げられている。平常における家庭と仕事の両立支援と併せて、非常時を想

定した両立支援策が備えとして必要である。さらには、「支援のすべてを行政任せにせず、（むしろ行政の対応できる限界を把握して）地域や個人でできること「自助・共助」を真剣に検討し、準備する必要性がある」と指摘する回答も少なくない。

最終設問は、特に育児中の女性として望む、復興に向けての取り組みについて聞いている。今回の調査で、転職や仕事内容の変化、多忙になったと回答した人たちは、単に雇用の状態を被災前に戻すことを望む意見ではなく、性別役割分担を基礎とした働き方自体を見直すべきとか、災害特別休暇等を充実させて、男女が共にワーク・ライフ・バランスの取れた生活がおくれる社会や子育てを優先させる社会を目指すことを求めており、熊本の真の復興には、男女共同参画の推進が不可欠であるという、当館の果たすべき役割についても再確認した。

地震は稀有の経験ではあるが、次世代に継承し、教訓を生かすためにも、復興計画の策定の際には、生活者の視点から女性や子ども等、多様な住民の意見が反映され個々人を大切にする視点を重視することや復興の過程に未来を担う子どもの存在を念頭に置いていくこと、日頃の備えや被災経験の伝承などを中心とした防災教育の充実も望まれている。

最後に災害時の性暴力やDV被害について、今回の調査ではわずかな数字しかあがっていないが、「問題が存在しない」ということでは決してない。当館が行った避難所キャラバン時のヒアリングや、その後の関係各所への相談件数が急増しているという事実、さらには時間の経過の中で「今だから言える」という声も聞こえてくる。今後も災害時における「声をあげられない」人の存在を忘れることなく、引き続き、暴力被害を防ぐ啓発活動に注力していきたい。

（注）子育て、障がい者介助、病人や高齢者の看護や介護

（付記）

※回答における自由記述は、ダ/デアル体に統一し、口語文や長文を意味・内容が変わらない程度に一部編集して記載した。

※自由記述の回答内容が設問に合致するよう、回答者が記入した項目（問番号）とは別項目に移して記載した記述がある。

Ⅲ　使用した調査票

熊本地震に伴う「育児中の女性」に関する調査

熊本市男女共同参画センターはあもにい
熊本市男女共同参画課

アンケート調査へのご協力のお願い

熊本市男女共同参画センターはあもにいは、男女共同参画の推進と市民文化の振興を目的としたさまざまな事業に取り組んでいます。このたび、下記の目的で『熊本地震に伴う「育児中の女性」に関する調査』を行うこととしました。

昨年４月 14 日と 16 日､熊本で２度にわたって大きな地震が発生し甚大な被害をもたらしました。過去に発生した災害において、女性たちが様々な困難を抱えたことによる課題が少なからず明らかになっています。

そこで、熊本地震発生から 1 年を経た今、特に子育て期にある女性たちの被災状況を把握し、被災時及び復興段階での女性をめぐる諸問題の解決に向けた検証を行うため、本調査を実施します。立ち入った質問もあるかと思いますので、答えられる範囲でお答えください。

１．氏名などは記入する必要はありません。回答はすべてコンピューターで統計的に処理されますので、個人のプライバシーやお考えが明らかになることは一切ありません。
２．回答は、質問文の指示に従ってご記入ください。また、選択肢で「その他」を選ばれた場合は、その理由や内容についても具体的にお書きください。
３．提出の際は、この調査票を二つ折りにして「アンケート回収箱」に入れてください。提出された調査票を部外者が閲覧することはありません。

提出締切日を　８月３１日（木）としておりますので、よろしくお願い致します。

お問合せ先
熊本市男女共同参画センターはあもにい　総務管理課
熊本市中央区黒髪３－３－１０
℡ 096－345-2550　　fax　096－345-0373
Mail　info@harmony-mimoza.org

統計上、必要ですので、まずあなた自身のことやご家族のことについてお尋ねします。
該当する答えの番号を〇で囲んでください。

あなたの現在のお住まいは	1．中央区　2．東区　3．西区　4．南区　5．北区 1．自宅（ 地震前と同じ・ 別 ） 2．みなし仮設住宅 （民間借上げ住宅 等） 3．応急仮設住宅　　4．親戚や知人宅 5．その他（　　）
あなたの年齢は	1．10 代　2．20 代　3．30 代　4．40 代以上
あなたの職業は	1.自営業主（農林漁業、商工サービス等）　2．家族従業者 3.自由業（開業医・弁護士・作家等） 4．会社、工場、商店、団体などに勤務　5．公務員　6．専業主婦 7．無職　8．学生　9．その他（　　）
あなたの働き方は	（就労形態） 1．常勤　2．非常勤・臨時・パート　3．その他（　　）
同居しているあなたの家族構成は	1．子ども（　　）人⇒（　　）歳・（　　）歳・（　　）歳 2．父　3．母（あなた）　4．祖父　5．祖母 6．その他・具体的にお書きください。 （　　）

問１　熊本地震以前、お子さんは日中どこで過ごしていましたか。

1．幼稚園　2．保育園　3．子ども園　4．保護者と自宅　5．実家に預ける
6．その他（具体的に　　）

問２　熊本地震をきっかけに、お子さんの過ごす場所等が変わりましたか。(一時的なものも含む)

1．変わらない
2．変わった　＊「休園したので保育ママに預けた」等、具体的にお書きください。
（　　）

問３　熊本地震をきっかけに就業状況が変わりましたか。(一時的なものも含む)

1．変わらない
2．変わった (失業　・　休業　・　雇用形態の変更※、その他　　)
※正社員からパート・アルバイト等

＜<u>問３で　２．就業状況が変わったと回答された方</u>にお聞きします。＞

問３－１　その理由を具体的に教えて下さい。

1．解雇　2．事業所の倒産　3．事業所の休業　4．事業所の移転
5．自己都合（自身の病気・怪我、家族の介護等、子どもの世話等、
その他　　）

使用した調査票

問４　２回目の地震の<u>直後</u>はどこで生活をしていましたか。

１．指定避難所

①　建物内　②　車中泊　③ その他　（例　テント等　　）

２．指定避難所以外の同じ区の避難所

①　建物内　②　車中泊　③ その他　（例　テント等　　）

３．別の区の避難所

①　中央区　②　東区　③　西区　④　南区　⑤　北区

４．自宅敷地内にとどまった

①　建物内　②　車中泊　③ その他　（例　テント等　　）

５．親戚や知人宅

６．その他　（　　）

＜<u>問４で　１または２、３、避難所にいた、と答えられた方</u>にお聞きします。＞

問４－１　避難所にはどれくらいの期間いましたか。

１．１週間以内　２．１週間以上２週間以内　３．２週間以上１ヶ月以内

４．１ヶ月以上３ヶ月以内　５．３ヶ月以上避難所閉鎖まで

問４－２　避難所から現在の場所に移られた理由を教えてください。

１．自宅の安全が確認されたから

２．仮設住宅、みなし仮設住宅など住む場所が見つかったから

３．避難所が閉鎖されたので仕方なく現在の場所に移った

４．親戚や友人等が勧めたから

５．その他（　　）

問４－３　あなたが入所した際、避難所にあったものに○をつけてください。（いくつでも）

１．男女別のトイレ

２．家族ごとの仕切り

３．男女別の更衣室

４．男女別の洗濯物干し場

５．女性のための相談室

６．子どもが遊ぶための専用のスペース

７．授乳室（もしくは授乳専用スペース）

８．要介護者用の部屋（もしくはスペース）

９．性暴力・ＤＶ防止のポスター・チラシ

問４－４　避難所での生活で不安・不便に感じたことは何ですか。当てはまると思うものに〇をつけてください。（３つまで）

１．集団生活によるストレス
２．希望する支援物資が手に入らない
３．着替えや授乳するスペースが確保されていない
４．子どもが夜泣きする等で迷惑をかけることへの心配
５．要支援の家族の介護
６．セクハラや性暴力・不審者
７．トイレが男女別ではない
８．衛生環境が良くない
９．女性のための相談窓口がない
１０．子どもが過ごす（遊ぶ・勉強する等の）場所がない
１１．その他（　　）

問４－５　避難所生活を経験して、あなたが「改善したほうが良い」と感じたことをお書きください。
（例：食事作りを女性が担当するなど、性別による役割分業が顕著だった　等）

（　　）

＜**問４で　４．自宅敷地内にとどまった、と答えられた方**にお聞きします。＞

問４－６　自宅または敷地内で過ごされた理由を教えてください。（いくつでも）

１．避難所で集団生活をしたくなかったから
２．小さい子どもがいるため、周囲に迷惑をかけると思ったから
３．家族に高齢者や障がい者がいたから
４．持病があったから
５．プライバシーが確保できないと思ったから
６．ペットがいたから
７．行くことができる範囲に避難所がなかったから
８．自宅の被害が少なかったから
９．その他（　　）

＜皆さんにお聞きします。＞

問５　２回目の地震直後に、直面した困難にはどのようなことがありましたか。（いくつでも）

１．高齢者や障がい者の家族を連れての避難が大変だった
２．子どもや乳幼児を連れての避難が大変だった
３．家族や親類、知人の安否確認ができなかった
４．避難場所がわからなかった
５．交通手段がなく移動が困難だった
６．ライフラインがストップした
７．その他（　　）

問６　地震後の生活で、あなたはどのような困難に直面しましたか。（いくつでも）

１．生活必需品（食料品、生活用水、生理用品、医薬品、介護用品、下着類、ミルクなど）が手に入りにくかった
２．正確な情報や必要な情報が入手しにくかった
３．子どもを預かってくれるところがなく、仕事に行けなかった
４．仕事を休むことができず、家族の世話や家の片づけができなかった
５．子どもだけで自宅・避難所で過ごさせた
６．子どもを職場に連れて行った
７．ライフラインがなかなか復旧しなかった
８．生活費が足りなかった
９．住む場所が見つからなかった
１０．家族のストレスのはけ口にされた
①暴言を言われた　②暴力をふるわれた　③その他（　　）
１１．性犯罪に巻き込まれた（巻き込まれそうになった）
１２．持病の治療ができなかった
１３．子どもが病気になったり、様子に変化が表れた
１４．精神的な不安や困りごとを共有・相談する人がいない
１５．その他（　　）

問７　男女共同参画センターはあもにいでは、地震後に、親子が避難所や家を離れ、リラックスできる場として「親子ルーム」を開設し、子育て相談等を実施していましたが、ご存知でしたか？

１．知っていた（情報入手先：　　）
２．利用した　（情報入手先：　　）
３．知らなかった

問８　地震の後、様々な困難が生じた時、あるいは不安を感じた際、頼りにしたものは何ですか。
（いくつでも）

１．配偶者・パートナー
２．配偶者以外の家族・親族
３．近所に住む友達（ママ友等）、地域活動（ＰＴＡ等）の仲間など
４．町内の民生委員
５．行政の相談窓口
６．ＳＮＳ・インターネットの情報等
７．熊本市のホームページ（HP）やFacebook
８．その他　具体的にお書きください。（　　）

問９　地震を経験して、現在あなたが困っていることがあったらお書きください。

（１）家族について

（　　）

（２）地域について

（　　）

（３）仕事について

（　　）

（４）健康について（身体的・精神的）

（　　）

（５）その他（生活再建や家計の問題等）

（　　）

問１０　今回の熊本地震を経験して、あなたはどんなことを考えましたか。
（地震直後と１年後の現在で、考え方が変わったことがありますか。）自由にお書きください。

（　　）

問１１　防災・復興体制の確立に男女共同参画の視点を反映させるためには、どのような内容を盛り込むべきだと思いますか。（３つまで）

１．防災・災害復興対策に関する意思決定の場に女性を責任者として登用する
２．女性の地域防災リーダーや災害復興アドバイザーを養成し、地域に住む人々の支援体制を実効性のあるものにする
３．行政の防災担当部局に女性の職員を積極的に配置する
４．避難所や仮設住宅の運営に女性の参画が必要であることをマニュアル化する
５．女性の視点に配慮した避難所運営マニュアルをつくる
６．障がいのある人、妊産婦、病人、高齢者、子どもなどのニーズをふまえたきめ細やかなサポート体制を整備する
７．被災したひとり親家庭や離職した女性に対する経済的支援や自立支援を行う
８．被災地での労働相談、解雇された被災者への支援を速やかに行う
９．男女を問わず、災害特別休暇を制度化する
１０．被災女性のための心とからだの相談体制を整備する

問１２　上記以外に、特に育児中の女性として、復興に向けての取り組みに関する意見やご希望などがありましたら、自由にお書きください。

（　　）

質問は以上です。ご回答いただきありがとうございました。

Ⅳ　参考資料

1．熊本市男女共同参画センターはあもにいの熊本地震後の状況

平成 28 年の熊本地震では、当館は建物の被害はそれほど大きなものではなかったが、震災から半月後に集約避難所に指定され、約３ヵ月半、避難所として稼働した。その後もメインホールは改修工事が終わるまで貸し出し休止となり、再開まで約１年かかった。

震災後は貸室予約者への対応や、男女共同参画センターとしての取り組みなど、指定管理者として何をすべきか、規定のない中、試行錯誤しながら対応した。その中で、県内の他館との情報共有や東日本大震災等を経験した全国の男女共同参画センターなどからのアドバイスが大変参考になり、励みになった。

本が落下散乱した情報資料室

タイルに亀裂が入った玄関前

メインホールの反響板ガイドレールが破損

1. 災害発生時の会館の対応

■４月 14 日（木）21 時 26 分　前震発生

市中央区震度５強　益城町震度７

・リハサール室 A にて利用者がいたが、ケガ等は特になく、すぐに帰宅された。

・発生直後から近隣の住民十数名が避難してきたため、受け入れを行うと同時に、事務局も３名が朝まで残り避難者対応、建物、設備被害確認、関係各所への連絡等に追われた。

・避難者は夜明けとともに全員帰宅。

■４月 15 日（金）は開館（主催講座は休講）

■４月 16 日（土）１時 25 分　本震発生

市中央区震度６強　益城町震度７

・被害状況、安全確認のため会館は臨時休館。

舞台装置、機械設備等の破損、損傷有り。

スタッフの安否確認　自宅全壊３名、ケガ人なし

２．被災状況と対応

■４月 17 日（日）責任者を中心に出勤可能者を召集。

建物被害、設備損傷の確認のため臨時休館。

被害内容：外壁タイルの剥がれ、ひび割れ、舞台装置損傷拡大。

館内壁のひび多数有り。

■４月 18 日（月）臨時休館

熊本市の所管課である男女共同参画課２名による会館被害確認実施。

確認後、男女共同参画課２名、はあもにい館長、各課責任者により今後の会館の対応を協議。結果は、熊本市営繕課による応急被災度判定等の安全性の確認が取れないと開館はできないとの判定。４月 22 日まで、臨時休館とすることが決定。

■4月 21 日（木）被災度判定実施

熊本市営繕課による建物被害状況等の被災度判定実施。

結果は利用可能との判定。この結果を受けて、今後の会館運営のスケジュールを協議した。

会館再開を４月 28 日に決定。27 日までは開館に向けて軽度の損傷箇所の修復や各設備の業者による点検を実施。

■4月 26 日（火）ライフライン復旧

ガスの点検が実施され、ガスの供給が再開。

空調も全館再開できる状態となる。

■4月 28 日（木）開館スタート

・損傷を受けたメインホール、多目的ホール以外の貸室再開。開講していた主催講座は、秋に延期した。

・幼児室を親子ルームとして開放。

・１Ｆエントランスにサテライトオフィス設置。

３．避難所開設

■5月３日 集約避難所開設決定

はあもにいが５月８日から中央区・北区（一部）の集約避難所となることが決定し、貸室貸出休止となる。ただし、情報資料室、幼児室親子ルーム、サテライトオフィス設置は継続。避難者については、単身女性や母子を中心に受け入れることに決定。

■5月７日 避難者受入れ前日

翌日からの避難者受け入れに向けて、市職員、はあもにいスタッフ、ボランティアにより避難所の設営、物資の搬入等を行う。

携帯電話会社より、Wi-Fi、充電器の協力の申し出があり各階に設置。

・避難所居住スペース……研修室（３部屋）リハーサル室Ｂ、Ｃ、学習室（北区）
・物資置き場……会議室
・避難者食事スペース……食のアトリエ
・洗濯機設置、物干しスペース……創作アトリエ
・救護室……和室
・看護師対応、リハビリ、マッサージルーム……スタジオ
・看護師控室……編集ルーム
・感染病等の隔離スペース……リハーサル室Ａ
・避難者受付・市職員事務スペース……１Ｆロビー
・会館の外にペット用テント設置
・シャワー……３Ｆシャワー室

避難所の間仕切り

避難所の女性専用物干し場

意見箱を設置した避難所のトイレ

参考資料

■５月８日 避難所開設初日

午後より避難者受け入れスタート。

受け入れ人数は 63 名。避難所になったことにより、はあもにいスタッフの勤務シフトは 24 時間体制になる。（交代制）

■５月 10 日 メインホールの新たな損傷発見

メインホールの吊り物精密点検が実施され、メインホール反射板のガイドレール、ガイドシュー等、修繕が必要な箇所が新たに見つかる。

■５月 13 日 多目的ホール精密点検

可動式客席の点検が業者により実施され、ワイヤー等の損傷が見つかる。

■６月８日 多目的ホール利用再開

軽度の損傷であった為、修繕が完了し利用再開。

多目的ホールは避難者住居スペースではなかったため、熊本市男女共同参画課の承認を取り、避難所と併用で利用開始。

■８月 14 日 避難所閉所

午前中までに避難者全員退所となり、はあもにい避難所は閉所した。

■９月１日　貸室貸出再開

メインホール以外の貸室の貸出再開。

メインホールの再開はこの時点では未定。

■ H29 年３月中旬 メインホール改修工事終了

地震による損傷箇所の工事が終了し、その後、熊本市による検査を受けて３月下旬には利用可能な状態になる。

■ H29 年４月１日 メインホール利用再開

ホール・貸室の修繕が完了し利用再開。全ての利用が可能となる。

４．支援物資、慰問公演等の受け入れ

集約避難所になってからは、全国から支援物資や慰問公演のお申し出があった。支援物資については、女性や子どもを対象にしたものに絞って受け入れをし、各避難所や女性団体、市民団体等を通じて必要なところへ配布した。

慰問公演については、１Ｆエントランスにステージを設営して実施。また、劇場間のネットワークを活かし、２Ｆ多目的ホールでも震災被災者に向けた公演の受け入れや他館との共催事業を実施した。

支援物資の仕分け

エントランスでの慰問公演

２Ｆ多目的ホールでの落語

２．熊本市男女共同参画センターはあもにいの取り組み

避難所キャラバンとその他の支援、啓発事業

平成 28 年 4 月 14 日（木）、16 日（土）の熊本地震発生後、市内には一時、250 カ所を超える避難所（自主避難所含む）ができ、多くの市民が避難した。
「熊本市男女共同参画センターはあもにい」には、阪神・淡路大震災や新潟県中越沖地震、東日本大震災など過去の震災での経験や報告書、全国の女性会館、男女共同参画センターなどのアドバイスが寄せられた。それを受け、各避難所において①男女共同参画の視点からの環境改善活動　②性暴力・DV 防止啓発活動　③自立支援　④支援者支援　⑤男女共同参画の視点からみた防災の啓発事業を行う「避難所キャラバン」を実施した。

【実施期間】
平成 28 年 4 月 15 日～平成 29 年 3 月末

【目的】

①男女共同参画の視点からの環境改善活動

男女共同参画の視点から避難所を調査し、現状を把握するとともに、それぞれの現場にあった改善策の提案を行い、望ましい環境を整える。

②性暴力・DV 防止啓発活動

各種機関と連携し、迅速な啓発活動を行うことで、震災後の性被害を未然に防ぐ。

③自立支援事業

災害弱者となり得る高齢者や女性、子育て世帯が、自ら進んで次の生活に移行できるように支援し、生活再建を促す。

④支援者支援事業

災害支援に対応する支援者に向けて、心理的負担を軽減し、支援者のこころと体の健康を守るため、災害時の支援者のメンタルヘルスに関する情報の周知・啓発を促す。

⑤男女共同参画の視点からみた防災啓発

今回の地震を機に、男女共同参画の視点からみた防災意識を広く啓発し、災害に強い地域づくりを進める。

【経緯】

①男女共同参画の視点からの環境改善

4 月 14 日の地震直後、内閣府から男女共同参画の視点からの避難所チェックシートが届き、避難所運営について男女のニーズの違いに留意するよう指示があった。さっそく同シートを活用し、熊本市内の一

時避難所（一部：13 カ所）における現状調査を開始。東日本大震災では、「更衣室や授乳室がない」「女性が必要な物資が不足していた」といった女性や子育て家庭への配慮が欠けていたことが課題としてあがっていた。また、「非常時は皆、大変だから自分は我慢しなくては」と、個人の悩みや要望は、声をあげづらい状況であったという。そこで、避難所を回る際に①「更衣室」や「授乳室」などを示すための表示札（P55 参照）の配布、②女性や子ども向けの支援物資の提供、③避難所が集約されてからは、男女それぞれのトイレに意見箱「みんなの声」を設置。単身女性や子育て世帯に要望や困りごとについて、直接ヒアリングを行う機会も設けた。

②性暴力・DV 防止啓発活動

震災後、全国の女性会館や男女共同参画センターから、性暴力、DV 防止に関する、さまざまなアドバイスがあった。東日本大震災女性ネットワーク調査チームによる報告書でも、震災後、子どもや女性を狙った性暴力、DV などが報告され、被害相談がいまだに続いているという状況がある。このような被害を未然に防ぐため、各種機関と連携し、迅速な啓発活動を行うこととした。

③自立支援事業

「男女共同参画の視点からの環境改善」の取り組みを進める中で、更衣室や授乳室の設置など、避難所の環境面が整っていく様子を確認することができた。また集約避難所では、高齢者が多くを占め、単身女性や子育て世帯とは違った課題を抱えていることが伺えた。例えば、自力で自宅の片付けや、仮設やみなし仮設住宅の手続きを進められないまま、避難所生活を続けている人も多く見受けられる。そのような人々が、現在の場所でとどまらずに、先に進むための取り組みが必要と判断し、自立に向けた支援を行うこととした。自分の身は自分で守ることを再認識してもらう防災講座や、栄養を考えた食生活についての話を盛り込んだ食事会などを実施。いずれも避難所という非日常の場から、現実に目を向けてもらうためのもの。そのほか、避難所では市民団体がさまざまな活動を通して、避難者の自立を支援しており、当館も情報を共有した。避難所閉所後は、足湯や子育て中の母親を対象にしたおしゃべり会など、心のケアにつながる場を設けた。

④支援者支援事業

過去の東日本大震災の際も言われたことであるが、災害支援にあたる支援者は、継続的な支援活動で休養がとれず、ストレスをため心身に不調をきたすことがある。熊本地震でも余震が多い中、自身も被災者でありながら、避難所の対応にあたる行政職員をはじめ、被災者支援活動をする支援者に向けて、災害支援時のからだやこころの変化に関する情報を周知し、休養取得を促すリーフレットを作成したり、ストレスケアに関する研修を実施した。

⑤男女共同参画の視点からみた防災啓発

非常時は、性別や家族構成、障がい・病気の有無や程度により、困りごとや必要な支援が異なる。そこで、性別や立場によるニーズの違いを学び、男女共同参画の視点からみた防災について考える機会を提供した。

【取り組み】

①　男女共同参画の視点からの環境改善活動

期間／場所
①平成 28 年 4 月 27 日（水）・28 日（木）／一時避難所（中央区・東区 13 カ所）
②平成 28 年 5 月 10 日（火）～13 日（金）／集約拠点避難所（21 カ所）
③平成 28 年 5 月 18 日（水）／集約拠点避難所（9 カ所）
④平成 28 年 5 月 25 日（水）～27 日（金）／集約拠点避難所（9 カ所）
⑤平成 28 年 6 月 15 日（水）・17 日（金）／集約拠点避難所（14 カ所）
⑥平成 28 年 7 月 13 日（水）～15 日（金）／集約拠点避難所（12 カ所）

◎内閣府チェックシートによる、避難所スタッフヒアリング

一時指定避難所の湖東中学校でのヒアリング。養護教諭が、避難者の人々に声をかけ、女性のニーズを把握しているとのことだった

「女性や子育て家庭に配慮した避難所の開設」「男女共同参画の視点に配慮した避難所の管理運営」の現状を確認するため、内閣府のチェックシートを用いて避難所スタッフにヒアリングを行った。質問事項は、「授乳室が設置してあるか」「管理責任者に男女両方が配置されているか」などの 19 項目。スペースが確保できず、更衣室を設置していないところには、他の避難所の事例を紹介するなど、状況を確認しながら環境改善を進めた。

◎更衣室や授乳室などの表示配布

一時避難所の健軍小学校で、民生委員（女性）にヒアリング。更衣室が使用中かどうか一目で分かるように「使用中」の表示を依頼した

避難所のヒアリングを行う際に、「更衣室」「授乳室」「女性用物干し場」といった表示物を持参。扉に掲示していただくよう提案し、設置がされていないところには、その必要性を説明し、設置を促した。

参考資料

◎意見箱「みんなの声」の設置・意見の回収

意見箱はなるべく人目につくところを避け、プライベートスペースが確保できるトイレに設置していただくよう依頼した

男女それぞれのトイレに意見箱「みんなの声」を設置。定期的に当センターが意見を回収し、行政担当者に改善を求めた。

意見箱に寄せられた内容は「食」や「対人関係」に関するもの。中には「生理用品が足りていない」「同じエリアに男女が混在していると不安」といった悩みも寄せられた。

女性トイレに設置するために生理用品を籠にセットし、各避難所にサンプルとして配布する取り組みも行った

改善例）・生理用品の配布の徹底
・おおまかな男女別エリアの設置
・シャワー室への時計の設置
・食事受け渡し時間の拡張
・夜間の騒音対応
・消灯時間の延長（21 時→22 時）
など

◎避難所入居者個別ヒアリング

一部の避難所で、女性や子育て世帯を対象に、要望や困りごとについてヒアリングを行った。

主に高齢者のヒアリングでは、家屋の損傷や住まいの確保についての不安、次いで体調面についての不安の声が多くあがっていた。中には避難所に来るまでに対人的な不安や悩みをかかえている人もいたため、すぐに市の職員と情報を共有し、対応した。

子育て世帯のヒアリングでは、子どもが騒ぐことで周囲に迷惑をかけることを気にしている声があった。

◎女性やこども向けの支援物資提供の呼びかけおよび配布

企業から提供のあった女性用の物資を防犯ブザーとともに各避難所に配布した

熊本での発災直後、全国の女性・男女共同参画センターの災害支援ネットワークに、女性や子ども向けの物資提供を呼びかけた。集まった物資は、紙おむつやおしりふき、離乳食、おもちゃ、女性用下着、生理用品、防犯ブザー、虫よけスプレー、洗濯ネットなど。各避難所をはじめ、市民団体と連携して、車中泊をしている家庭や公共の施設などにも配布した。着替えを持たずに避難した方が多い中、衣類の支援物資が少ない状況にあったため、下着の配布は非常に喜ばれた。

② 性暴力、ＤＶ防止啓発活動

◎性暴力・DV 防止ポスター・チラシ、カード、HP による啓発

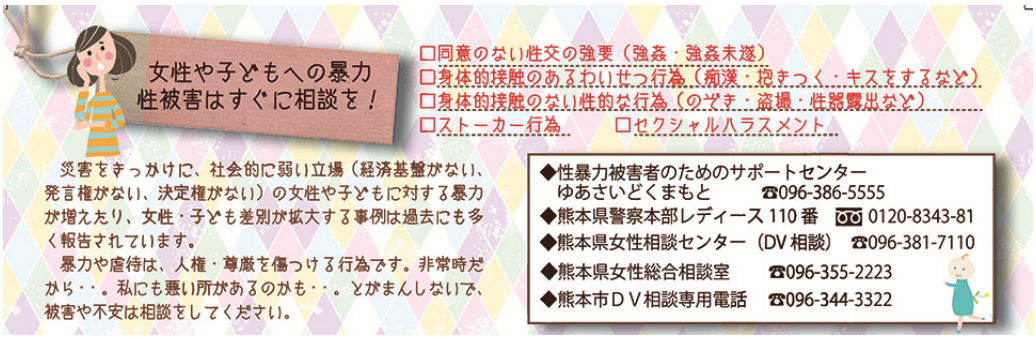
過去の事例や気を付ける点、相談窓口一覧を紹介したチラシ・ポスター

地震後の混乱に乗じた性被害を未然に防ぐため、啓発ポスター・チラシを作成し、各避難所で掲示し、注意喚起を促した。テレビや新聞、ラジオ、インターネットなどのメディアに多く取り上げられ、広く周知する機会となった。

また、国際協力 NGO の協力を得て、相談窓口を記載したカードを作成し、支援物資につけて配布したり、当館 HP に「熊本地震・被災女性サイト」をつくり、相談窓口など情報を提供した。

各避難所の掲示板をはじめ、男女それぞれのトイレに掲示を行った

性暴力・DV を防止するためには、周囲の見守りの目も必要ということを説明し、啓発した



支援物資の女性用品に性暴力・DV 防止の啓発カードを添え、女性が啓発内容にふれる機会をつくった

③　自立支援事業

◎防災ミニ講座

サンライフの避難者から希望者を募り、講座を開催。「私は乾パンよりも羊羹がいい」など、それぞれの思いを反映させたリストが出来上がった

災害時に備えておくと安心なものについて、震災当時を振り返りながら、それぞれ自分の非常時の持ち出しリストを作成。自分の身は自分で守ることを再確認した。後半は茶話会を行い、震災の経験を共有した。

期間／場所
①　平成 28 年 6 月 9 日（木）18 時半～19 時半／はあもにい 2 階食のアトリエ （対象：はあもにい避難者、参加者：25 人） ②平成 28 年 6 月 22 日（水）16 時～17 時／はあもにい 1 階ロビー （対象：サンライフ避難者、参加者 7 人） ③平成 28 年 7 月 21 日（木）10 時～11 時／子ども文化会館２Ｆ談話コーナー （対象：子ども文化会館避難者、参加者 7 人）

◎栄養士による食に関する話と防災備蓄品等を利用した食事会

出来上がった料理は、避難者自身で配膳を行ってもらい、コミュニケーションを図った

食生活改善推進員が、防災備蓄品を活用した料理を避難者に振る舞った。また今後、避難所を出てからの食生活に役立つように、栄養バランスや健康について栄養士が説明した。

期間／場所
①　平成 28 年 6 月 30 日（木）11 時半～13 時／はあもにい 2 階食のアトリエ （対象：はあもにい・サンライフ避難者、参加者：29 人） ②平成 28 年 7 月 8 日（金）11 時半～13 時／はあもにい 2 階食のアトリエ （対象：はあもにい・サンライフ避難者、参加者：26 人） ③平成 28 年 7 月 20 日（水）11 時半～13 時／はあもにい 2 階食のアトリエ （対象：はあもにい・サンライフ避難者、参加者：22 人）

◎親子メンタルケア講座

地震後の子どものストレス反応に対するケアの方法などで不安を抱える保護者が対象。親自身が安心を感じ、落ち着くことの大切さを伝える出張講座を実施した。プラン A「親子でゆったりベビーマッサージ」、プラン B「大人のためのバルーンアート＋バイオリン演奏」の 2 つのプログラムを実施。

期間／場所
① 平成 28 年 8 月 6 日（土）10 時半～11 時半／やまばと保育園（プラン A） （対象：職員・保護者、参加者 40 人） ② 平成 28 年 8 月 6 日（土）13 時～13 時半／児童養護施設　慈愛園（プラン A） （対象：職員・保護者、参加者 35 人） ③ 平成 28 年 8 月 6 日（土）14 時～14 時 45 分／ 情緒障害児短期治療施設　こども LEC センター（プラン A） （対象：職員・保護者、参加者 30 人） ④ 平成 28 年 8 月 6 日（土）17 時半～18 時／児童養護施設 藤崎台童園（プラン A） （対象：職員・保護者、参加者 30 人） ⑤ 平成 28 年 9 月 14 日（水）10 時半～12 時／あゆみ保育園　子育て支援センター （プラン B）（対象：職員・保護者、参加者 24 人） 実施主体：リ☆スタートくまもと

◎足湯＆茶話会・防災クッキング

中央区と連携し、震災被災者支援として、はあもにいで足湯と茶話会、防災クッキング教室を組み合わせた事業を実施した。足湯は、新潟中越地震の際にも注目されたもの。熊本地震発生後に来熊した「チーム新潟」からその方法を熊本の活動団体が受け継いで行った。被災者に足湯やハンドマッサージをしながら、日ごろの悩みや不安を聞きだす場となった。

期間／場所
① 平成 28 年 9 月 2 日(金)・9 日(金)・5 日(月)・12 日（月）・26 日（月） 10 時～12 時／はあもにい 1 ロビー（対象：一般参加者　参加人数：のべ 26 人） ② 平成 28 年 10 月 3 日（月）・17 日（月）10 時～12 時／はあもにい 1 ロビー （対象：一般参加者　参加人数：のべ 8 人） ③ 平成 28 年 11 月 7 日（月）・17 日（月）・21 日（月） 10 時～12 時／はあもにい 1 ロビー（対象：一般参加者：のべ 18 人） ④ 平成 28 年 12 月 5 日（月）・12 日（月）・19 日（月） 10 時～13 時／はあもにい 1 ロビー（対象：一般参加者：のべ 28 人） ⑤ 平成 29 年 1 月 9 日（月）・16 日（月）23 日（月）・30 日（月） 10 時～13 時／はあもにい 1 ロビー（対象：一般参加者：のべ 41 人） ⑥ 平成 29 年 2 月 6 日（月）・13 日（月）・20 日（月）・27 日（月） 10 時～13 時／はあもにい 1 ロビー（対象：一般参加者：のべ 26 人） ⑦ 平成 29 年 3 月 6 日（月）13 日（月）・22 日（水） 10 時～13 時(22 日のみ 10 時～12 時)／はあもにい 1 ロビー （対象：一般参加者：のべ 27 人） 実施主体：NPO 法人小町ウィング

◎子育ておしゃべり会

震災後における母子の精神的不安の軽減のためのおしゃべり会を実施。折り紙など、親子で楽しめる内容も盛り込んだ。

毎回、臨床心理士が対応し、母親が今まで言えずにいた悩みなどを吐き出す場となった。

期間／場所
① 平成 28 年 6 月 18 日（土）13 時半～16 時半／はあもにい 1 階幼児室 （対象：親子、参加者：1 組 3 人） ② 平成 28 年 7 月 9 日（土）16 時～18 時／はあもにい 1 階幼児室 （対象：親子、参加者：1 組 3 人） ③ 平成 28 年 8 月 6 日（土）13 時半～16 時／はあもにい 1 階幼児室 （対象：親子、参加者：2 組 6 人）

④　平成 28 年 9 月 3 日（土）15 時～17 時／はあもにい 1 階幼児室
（対象：親子、参加者：2 組 4 人）
⑤　平成 28 年 10 月 1 日（土）13 時半～16 時／はあもにい 1 階幼児室
（対象：親子、参加者：4 組 10 人）
⑥　平成 28 年 11 月 5 日（土）15 時～17 時／はあもにい 1 階幼児室
（対象：親子、参加者：5 組 13 人）
⑦　平成 28 年 12 月 3 日（土）13 時半～16 時／はあもにい 1 階幼児室
（対象：親子、参加者：4 組 11 人）
講師：土居隆子氏（臨床心理士、活水女子大特別専任教授）
　　大島英世氏（臨床心理士、志學館大学人間関係学部講師）

◎「LADY　TALK」in 熊本

育児と家事に忙しい母親を対象に、震災後、後回しにしがちな「自分自身」と向き合い、自分を大切にする機会を提供した企画。公益財団法人ジョイセフとの共催で、母親を応援するゲストトークと、健康美をつかむためのレクチャープログラムを実施した。

平成 28 年 11 月 24 日（木）10 時～12 時／はあもにい 2 階多目的ホール
（対象：乳幼児～3 歳のお子さんと母親・母親のみも可、参加者：45 組 93 人）
講師：光畑由佳氏（モーハウス代表）、岡野真美氏（ポスチュアスタイリスト）

④　支援者支援事業

◎自己メンテナンスシートの作成

避難所運営にあたっている行政担当者や、支援活動を行っている市民団体等に向けて、「よりよい支援を続けるための自己メンテナンスシート」を作成して配布。支援者自身がストレス反応について知り、休養をとり、心身を整えることの必要性を伝えている。作成にあたっては、国際協力 NGO からの支援を受け、臨床心理士でもある、活水女子大学土居隆子特別専任教授の監修のもと、作成した。シートは当館 HP からダウンロードできる。

◎ストレスケア研修

被災者支援活動にあたっている市民団体を対象に、自己メンテナンスシートを用いてストレスケアの研修を実施。リラックス体操もあわせて実施した。

期間／場所
◎平成 28 年 8 月 25 日（木）11 時～12 時／はあもにい 2 階学習室 （対象：はあもにいフェスタ参加市民団体、参加者：23 人（職員含）） ◎平成 28 年 9 月 14 日（木）11 時～12 時半／カフェ型保健室しらかば （対象：NPO 法人小町ウィング、参加者：12 人） ◎平成 28 年 11 月 4 日（金）10 時半～12 時／はあもにい 4 階研修室 B （対象：傾聴ボランティアグループ、参加者：13 人） 講師：土居隆子氏（臨床心理士、活水女子大特別専任教授）

参考資料

⑤　男女共同参画の視点からみた防災啓発

◎シンポジウム　「災害と女の子たち～ガールズが直面する二重の危機」

災害時における、思春期、若年期の女性の支援について考えるシンポジウムを実施。基調講演後にパネリストを加え、東日本大震災を高校生のときに経験した女子学生や熊本で被災した女子学生の生の声、少年・女性犯罪に取り組む弁護士による、若者の状況報告などが行われた。

期間／場所
◎平成 28 年 9 月 22 日（木・祝）13 時～15 時 45 分／くまもと県民交流館パレアホール（対象：一般、参加者：110 人） 主催：熊本市男女共同参画センターはあもにい 共催：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン 講師：大崎麻子氏（国際協力・ジェンダー専門家、関西学院大学総合政策学部客員教授、プラン・インターナショナル・ジャパン理事） パネリスト：大崎麻子氏 園田理美氏（弁護士） 佐藤若菜氏（福島／女子の暮らしの研究所研究員） 津曲結子氏（九州看護福祉大学ピア・カウンセリングサークル部員） 藤原みのり氏（九州看護福祉大学ピア・カウンセリングサークル部員） コーディネーター：伊井純子氏（フリーアナウンサー）

◎男女共同参画の視点からみた防災講座「いまこそ学ぼう！新時代の家庭と地域の防災力」

男女共同参画の視点による防災について基礎知識を学んでいただく基礎講座と、避難所の運営に関し、ワークショップも盛り込み、より深く学んでいただく実践編を実施。

期間／場所
◎基礎講座 平成 28 年 10 月 22 日（土）13 時 30 分～16 時／はあもにい学習室 （対象：一般　参加者：34 人） ◎実践編 平成 28 年 10 月 23 日（日）10 時～16 時／はあもにい学習室 （対象：一般　参加者：19 人） 講師：浅野幸子氏（減災と男女共同参画研修センター　共同代表）

◎防災備蓄品を利用した料理教室「パパと作ろう！パンの缶詰 DE プリティケーキ」

非常食のパンの缶詰を活用した父子料理教室を実施。作り始める前に、出来上がりのイメージを描き、パンにそれぞれデコレーションをした。

期間／場所
◎平成 28 年 11 月 26 日（土）13 時 30 分～16 時 30 分／はあもにい食のアトリエ （対象：年中～小学 3 年生の子どもと父親　参加者：20 人） 講師：水野 直樹氏（日本パパ料理協会公認肥後パパ料理の会）

参考資料

◎第５回ミモザフェスティバル　防災パネル展示

３月８日の国際女性デーを記念したフェスティバルにおいて、市内中心部の商店街で、男女共同参画の視点による防災パネルを展示。あわせて、携帯トイレも配布した。

フェスティバルでは、その他、男女共同参画クイズラリーや熊本応援マルシェ、チャリティイベント「ホワイトリボンラン」や無料上映会なども実施。

期間／場所
第５回ミモザフェスティバル ◎平成 29 年３月４日（土）男女共同参画パネル展示／クイズラリー／マルシェ、他 10 時～16 時 30 分／熊本市内上通商店街、びぷれす広場 ホワイトリボンラン／10 時～11 時半／熊本城二の丸広場 ３月５日（日）無料上映会／14 時～15 時 30 分／ はあもにい２階多目的ホール （対象：一般　参加人数：のべ 4,696 人）

◎黒髪校区・碩台校区　熊本地震活動報告集会

熊本地震発災直後からの黒髪校区、碩台校区における、自治会の活動、大学の避難所運営や障がい者支援施設、福祉避難所の運営、そして熊本市男女共同参画センターはあもにいの避難所での性暴力、DV 防止啓発活動などが報告された。

期間／場所
◎平成 29 年３月７日（火）13 時～16 時／はあもにい２階多目的ホール （対象：黒髪校区・碩台校区居住者および関心のある方、参加者：110 人） 実施主体：熊本市高齢者支援センターささえりあ浄行寺

熊本地震を経験した「育児中の女性」へのアンケート調査 報告書

平成 30 年3月

編集・発行

熊本市男女共同参画センターはあもにい

〒860-0862 熊本市中央区黒髪3丁目3番10号
TEL:096-345-2550　FAX:096-345-0373
mail:info@harmony-mimoza.org
URL:http://www.harmony-mimoza.org

熊本市男女共同参画センター

はあもにい